㈶広島市文化財団発掘調査報告書　第８集

成岡Ｂ地点遺跡

―広島市安芸区中野東二丁目所在―

2001

財団法人広島市文化財団

はしがき

広島市安芸区の旧瀬野川町は，ほぼ中央に瀬野川が西流し，その両岸に向かって山々が迫るといった自然に恵まれた町です。この瀬野川流域沿いは，現在はＪＲ西日本・山陽本線と一般国道２号が，また古代には山陽道が整備されており，古くから交通の要衝として栄えてきた地域でもあります。最近まで本格的な発掘調査が実施されておらず先史時代の実態はあまりよく分かっていませんが，古墳や一..城跡などの遺跡がこの瀬野川沿いの丘陵、ヒに数多く存在していることが知られており，このことを傍証させるものです。

ところで近年，一般国道２号の交通渋滞の解消を目的として，東広島市と広島市を結ぶバイパス建設工事が計画されました。一昨年度は，その進入路の道路整備工事に伴って発掘調査が行われ，弥生日寺代終末期の集落跡と古墳時代初頭の古墳群が発見されました。そして，このたびの成岡Ｂ地点遺跡の発掘調査では，弥生時代中期末から終末期に造られた17基の墳墓が発見されました。これまで調査事例が少なかった瀬野川流域だけでなく，弥生時代中期に遡る墳墓の調査事例の少ない広島市域においても，とても貴重な発見となりました。

この報告書が，ひとりでも多くの市民の方々に活用され，広島市域の歴史を理解するうえで少しでも役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが，この調査にあたって，ご指導，ご助言をいただきました諸先生，ご協力いただきました関係諸機関・関係者の皆様並びに暑い中発掘調査に従事していただいた臨時作業員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成13（2001）年11月

財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

例　　言

1．本書は，広島市安芸区中野東二丁目地内における一般国道２号（東広島バイパス）建設工事に伴って平成12年度に実施した成岡Ｂ地点遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）広島国道工事事務所から委託を受け，財団法人広島市文化財団が実施した。

3．本書の執筆`編集は，稲坂恒宏が実施した。

4．遺構の実測は稲坂・高下洋一が実施し，新本万里子が補佐した。遺構の写真撮影は，稲坂・高下が実施した。遺物の実測は高下が実施し，図面の製図は高下・岡野孝子，遺物の写真撮影は，高下が実施した。

5．本書に掲載した航空写真の撮影は，スタジオ・ユニに委託した。

6．基準点測量は，株式会社イーテックに委託した。なお，第４図における基準点①と基準点②のデータは以下のとおりである。
基準点①Ｘ＝－ 179078.676　Ｙ＝ 37319.750　基準点②Ｘ＝－ 179059.O06　Ｙ＝ 37305.O04
基準点①から基準点②への方向角は 323°08'32" である。

7．土層断画図及び土器の色調は『新版標準土色帖』（1999 年版）に拠った。

8．本書に掲載した挿図の方位は，第１図と第２図を除き，すべて磁北である。

9．第１図は，国土交通省国土地理院発行の 50,OOO 分の１の地形図（海田）を複製して使用した。

10．本書に使用した遺構の略記号は，下記のとおりである。
ＳＴ：土壙墓・木棺墓　ＳＰ：土器棺墓・土器蓋土壙墓
ＳＫ：土坑　　ＳＸ：テラス状遺構

11．本発掘調査で得られた資料については，広島市教育委員会から委託を受けて財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。

目　　次

Ⅰ　は　じ　め　に…… 1
Ⅱ　位　置　と　環　境…… 4
Ⅲ　遺　構　と　遺　物…… 9
Ⅳ　ま　　と　　め…… 28

付　表　目　次

土器観察表…… 24

挿　図　目　次

第１図　成岡Ｂ地点遺跡の位置と周辺遺跡分布図 …… 2
第２図　成岡Ｂ地点遺跡位置図 …… 3
第３図　成岡第４号古墳地形測量図 …… 5
第４図　成岡Ｂ地点遺跡遺構配置図 …… 10
第５図　ＳＴ１・ＳＴ２・ＳＴ３実測図 …… 11
第６図　ＳＴ４・ＳＴ５・ＳＴ６・ＳＴ７実測図 …… 13
第７図　ＳＴ８・ＳＴ９・ＳＴ10実測図 …… 15
第８図　ＳＴ11・ＳＴ12・ＳＴ13実測図……17
第９図　ＳＰ１・ＳＰ２・ＳＰ３・ＳＰ４実測図 …… 19
第10図　ＳＫ１・ＳＸ１実測図…… 21
第11図　出土遺物実測図〔１〕…… 26
第12図　出土遺物実測図〔２〕…… 27

図　版　目　次

図版表紙　　成岡Ｂ地点遺跡航空写真（北東から）
図版Ⅰ　a　成岡Ｂ地点遺跡遠景（北東から）
　　b　成岡Ｂ地点遺跡航空写真（調査後・北から）
図版Ⅱ　　遺構完掘状況（北東から）
図版Ⅲ　a　ＳＴ１完掘状況（南東から）
　　b　ＳＴ３完掘状況（南東から）
図版Ⅳ　a　ＳＴ２礫出土状況（南東から）
　　b　ＳＴ２完掘状況（南東から）
図版Ⅴ　a　ＳＴ４・ＳＴ５・ＳＴ７完掘状況（南東から）
　　b　ＳＴ６完掘状況（南東から）
図版Ⅵ　a　ＳＴ８完掘状況（南東から）
　　b　ＳＴ９完掘状況（南東から）
図版Ⅶ　a　ＳＴ10完掘状況（南から）
　　b　ＳＴ11完掘状況（北から）
図版Ⅷ　a　ＳＴ12完掘状況（東から）
　　b　ＳＴ13完掘状況（南東から）
図版Ⅸ　a　ＳＰ１土器棺確認状況（東から）
　　b　ＳＰ２墓標石確認状況（北西から）
図版Ⅹ　a　ＳＰ２土器棺確認状況（北西から）
　　b　ＳＰ３土器棺確認状況（南東から）
図版ⅩⅠ a　ＳＰ４土器蓋確認状況（北から）
　　b　ＳＫ１完掘状況（南から）
図版ⅩⅡ a　ＳＸ１完掘状況（北から）
　　b　ＳＸ１土器出土状況（東から）
図版ⅩⅢ a　出土遺物〔１〕
図版ⅩⅣ　　出土遺物〔２〕

Ⅰ　はじめに

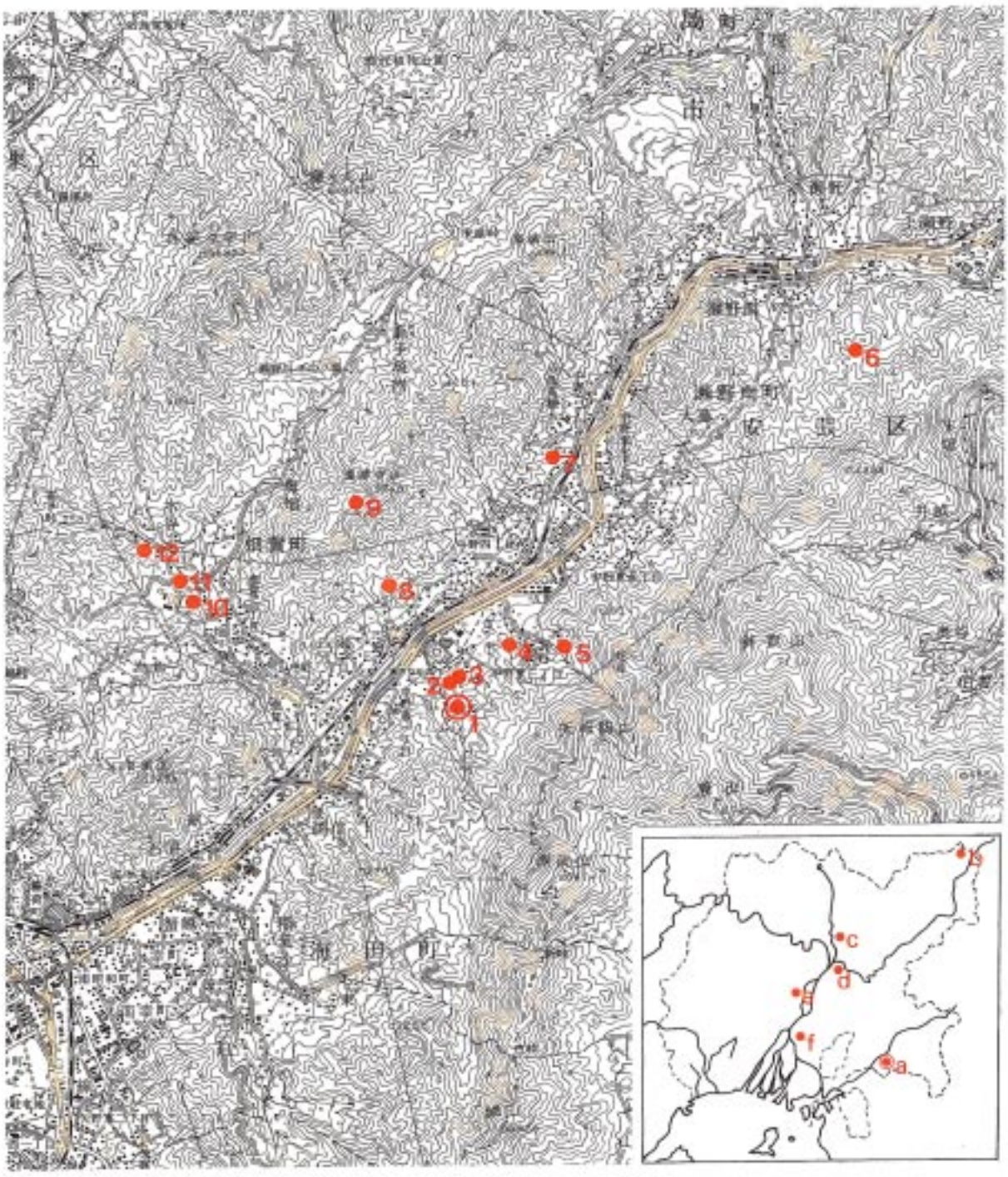
広島市教育委員会（以下「市教委」）は平成９年３月31日に，建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）広島国道工事事務所（以下「広島国道」）から，一般国道２号（東広島バイパス）建設事業地内における埋蔵文化財の有無並びに取り扱いについて照会を受けた。市教委はこれを受けて，事業地内における現地踏査及び試掘調査を実施した結果，安芸区中野東二丁目地内（27番地・35番地）において，弥生時代の住居跡（本調査では土壙墓(ＳＴ11)と判明）を確認した。
そして市教委は，遺跡の存在を確認した旨を平成12年１月28日に広島国道に回答した。以後，この遺跡の取り扱いについて両者は協議を重ねたが，地形的に計画変更は困難であり，現状保存は困難であるとの結論に達し，発掘調査を実施し記録保存の措置を講じることとなった。

そこで広島国道は，平成12年３月24日に財団法人広島市文化財団（以下「文化財団」）に対して，安芸区中野東二丁目27番地及び35番地に所在する成岡Ｂ地点遺跡を調査対象として，発掘調査を依頼した。これを受けて文化財団文化科学部文化財課では，平成12年７月３日から同年12月13日にかけて現地調査を実施した。

発掘調査の関係者は下記のとおりである。

調査委託者　国土交通省中国地方整備局広島国道工事事務所
調査主体　　財団法人広島市文化財団
調査担当課　財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者　竹本　輝男　常務理事
　　堂官　正昭　文化科学部長
　　石田　彰紀　文化財課長
　　若島　一則　文化財課主任指導主事
　　今田日出登　文化財課主任
調査担当者　高下　洋一　文化財課学芸員
　　稲坂　恒宏　文化財課学芸員
調査補助員（50音順）
（発掘調査）今田章範　河本翔伍　河野勝　貞藤静磨　柴崎安奈　新本万里子　俵司寿馬
　　永妻安子　古本弘　若野政司　和田実千代
（整理作業）酒本由理郁　菅原彰子　住川香代子　橋本礼子

なお，国土交通省中国地方整備局広島国道工事事務所，広島市安芸区役所農林建設部土木課，同市民部まちづくり推進課，広島市教育委員会生涯学習課文化財担当，広島市中野公民館の職員の方々には，調査を円滑に進めるにあたって多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに，調査期間中及び報告書作成にあたり，本財団埋蔵文化財発掘調査指導委員会の委員である広島大学名誉教授潮見浩先生，同教授川越哲志先生，同教授河瀬正利先生，同教授古瀬清秀先生からは，貴重なご助言，ご指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。



（位置図）

a．成岡Ｂ地点遺跡　b．佐久良遺跡　c．丸子山遺跡　d．狐ヶ城遺跡

e．大町七九谷Ｃ地点遺跡　f．早稲田神社東斜面遺跡

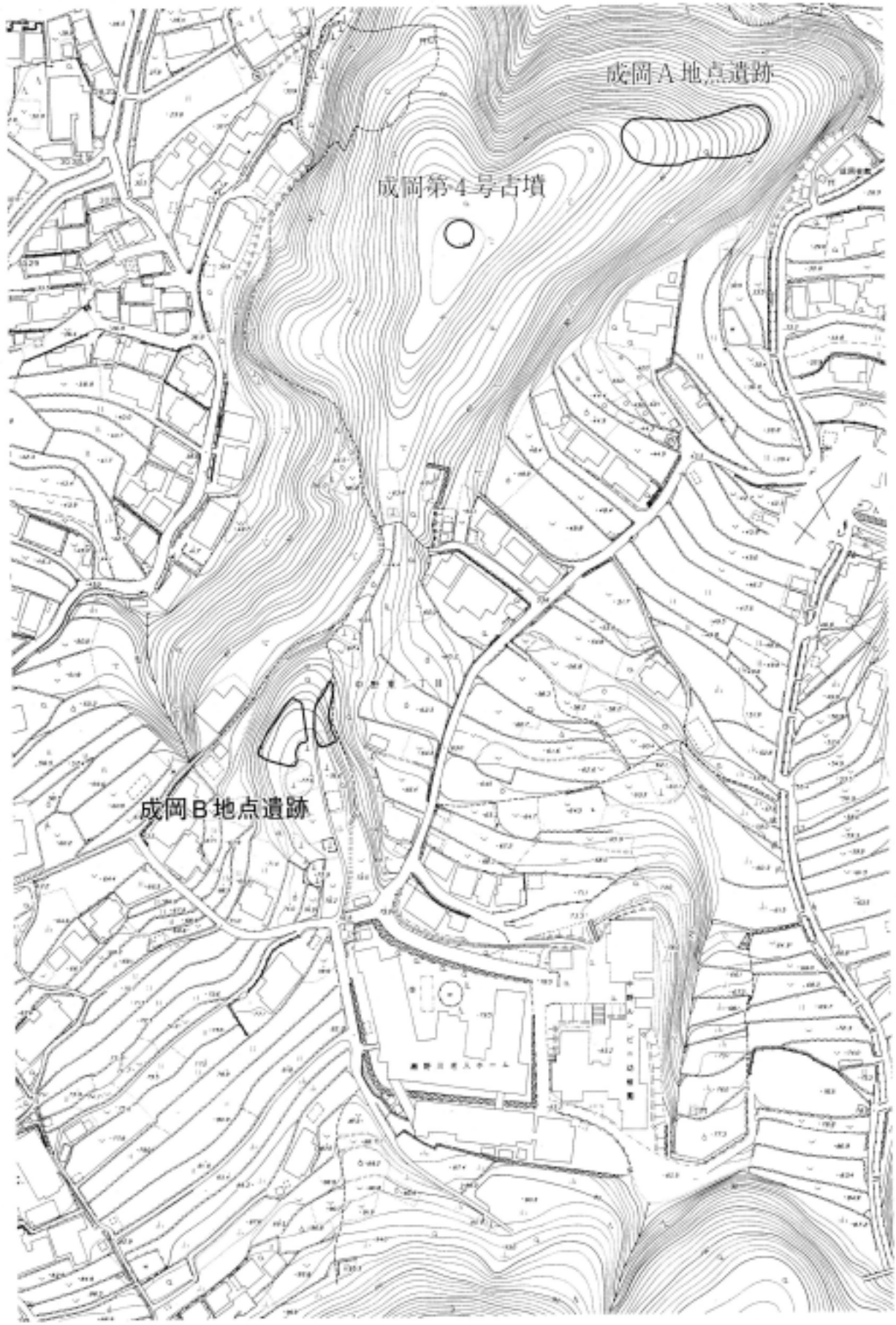
（周辺遺跡分布図）

1．成岡Ｂ地点遺跡　2．成岡第４号古墳　3．成岡Ａ地点遺跡　4．山王貝塚　5．三谷遺跡

6．一井木貝塚　7．井原遺跡　8．川原地貝塚　9．蓮華寺山頂遺跡

10．中須賀神社境内遺跡　11．水谷遺跡　12．水谷貝塚

第１図　成岡Ｂ地点遺跡の位置と周辺遺跡分布図（Ｓ＝１：50,000）



第２図　成岡Ｂ地点遺跡位置図（Ｓ＝１：2,000）

Ⅱ　位置と環境

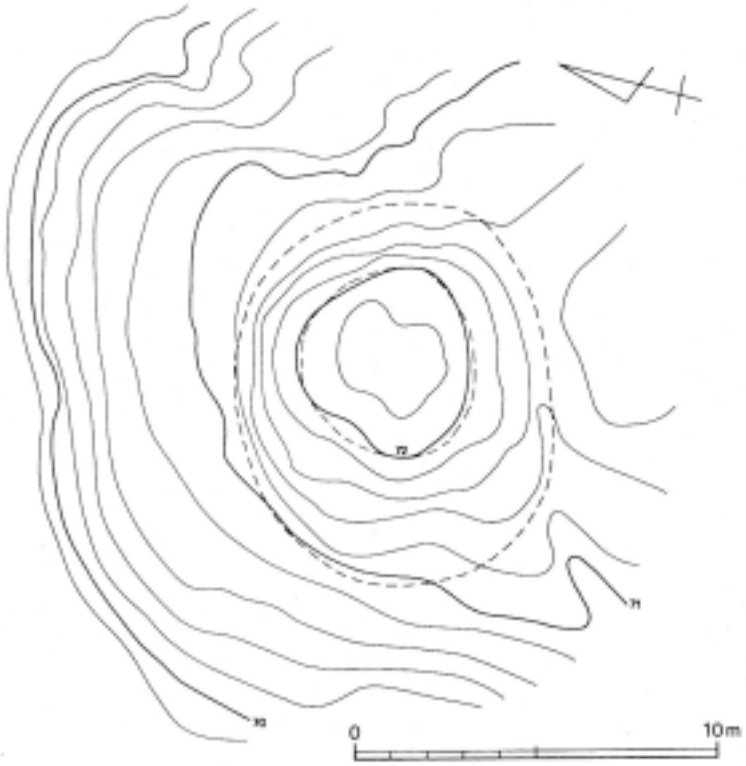
１．自然的・地理的環境

成岡Ｂ地点遺跡は，広島市安芸区中野東二丁目に所在する。

中野地区を含む旧瀬野川町域の地形を特徴づけているのが，町内のほぼ中央を流れる瀬野川である。瀬野川は，賀茂台地の西部にあたる東広島市八本松町及び同志和町に流れを発し，南西方面へ約 23 ㎞流下して広島湾頭東部の海田湾に注いでいる。旧町域内においては，瀬野川は北東から南西に向かって貫流しており，その途中の一貫田・落合・砂走の地区でそれぞれ熊野川・榎ノ山川・畑賀川の各支流が合流している。また，この瀬野川を挟んで，北側に２列と南側に１列の山列が川筋の方向とほぼ平行して存在している。すなわち，呉娑々宇山（標高 682.2 ｍ）を主峰とする最も北寄りの列と，その南側に位置し全体的にやや標高の低い蓮華寺山（標高 374 ｍ）などの中央の列，そして鉾取山（標高 711.5 ｍ）を中心とする南寄りの列の計３列である。概ね北東－南西方向に並んで位置しているこれらの山列と瀬野川によって，この地域の大まかな地勢が構成されているといえる。旧町域の大半は山地で占められており，宅地や耕作地となりえる平坦地は，瀬野川本流及び各支流の両岸を中心に形成された沖積地にほぼ限られている。そしてその中でも最大のものは，中野地区の瀬野川両岸から畑賀地区の畑賀川一帯にかけて広がる平坦地で，本遺跡はその南縁の一角に位置している。

本遺跡は，先に述べた南寄りの山列に属する天狗防山（標高 591 ｍ）から，瀬野川東岸へ向かって北西方向に緩やかに下りながら伸びる尾根上に立地している。この尾根が山塊から分派する一帯は宅地化と耕地化が進んでおり，尾根は山塊から切り離された独立丘陵の様相を呈している。本遺跡はその南端付近の最高所に位置しており，標高は約 80 ｍである。尾根は，本遺跡の北側で一旦低くなってから再び標高約 74 ｍまで高まり，そこで北東方向へと向きを変えて徐々に下っている。なお，高まりから少し下った尾根上には，直径約 8.5 ｍの円墳と推定される成岡第４号古墳が位置する（第３図）。また，尾根の先端の標高 50 ～ 60 ｍ付近には成岡Ａ地点遺跡 1)がある。ここからは弥生時代終末頃の集落跡及び古墳時代初頭の古墳３基が確認されており，地理的な近さから本遺跡とのかかわりが注目される。

さて，本遺跡から北方を望むと，瀬野川とその両岸に広がる平坦地及び背後の山列の一部が観望できる。また本遺跡の立地する尾根の東西両側には，それぞれ同様な尾根が並行して延びている。そして東側尾根との間には成岡川が，また西側尾根との聞には押手川がそれぞれ瀬野川へ向かって流下しており，それら小河川の両岸には小規模ながらも沖積地が形成されている。こうした沖積地を生産基盤として人々の生活が営まれたものと考えられ，また尾根の麓あるいは本遺跡から南方へと登った尾根筋等に彼らの集落地を求めることができるのではないだろうか。



第３図　成岡４号古墳地形測量図（Ｓ＝１：200）

２．歴史的環境

本遺跡の位置している瀬野川流域においては，縄文時代以前にまで遡る遺跡は現在までのところ確認されていない2)。弥生時代においては，本遺跡と同様の尾根上を中心にいくつかの遺跡の存在が知られているものの，先述した成岡Ａ地点遺跡以外は発掘調査が実施されておらず，その詳細な実態は明らかではない。平成11年度に調査された成岡Ａ地点遺跡では，弥生時代終末頃の住居跡等が確認され，この時期の集落の状況が初めて明らかとなった。今後さらに調査が進めば，当時の様相も次第に明らかになると考えられる。ただ，遺跡の立地状況や土器の特徴などを見てみると，これまで多くの発掘調査が実施されてきた太田川下流域や八幡川流域等での弥生時代後半期の状況と同様な傾向を示していると考えられる。

さてここで，発掘調査が多く実施されてきた市中央部の太田川流域及び西部の八幡川流域における弥生時代の主な遺跡について概観してみることにする。

まず集落またはその関連遺跡であるが，前期に属するものとして中山貝塚3)・梶木貝塚4)・及び山根遺跡5)が挙げられる。これらの遺跡の大部分からは建物跡等の遺構は確認されておらず，遺跡を営んだ人々の集落等の様相については明らかではない。中期の遺跡に関してもその数は多くはなく，まず太田川流域を見てみると次のとおりである。大明地遺跡6)は安佐北区口田に所在し，太田川東岸の丘陵上に位置している。集落跡や古墳等が確認されているが，そのうち中期前葉から中葉の時期に属する遺構としては竪穴住居跡１軒・土坑１基等がある。弘住遺跡7)は安佐北区口田南に所在し，同じく太田川東岸の丘陵上に位置している。ここでは，中期中葉の土器を伴った配石遺構が確

認されている。太田川放水路固定堰遺跡 8)は安佐南区長束に所在し，太田川流路中の砂層から中期から後期の土器数点が出土した。牛田早稲田遺跡 9)は東区牛田早稲田に所在し，太田川の三角州を眼下に望む尾根上に位置している。中期終末から後期初頭の時期と考えられる住居跡 1 軒及び土坑等が確認されている。これらの遺跡は，太田川河口ないしはその沖積地を直接眼下に見下ろす地点に立地し，土器の出土点数も少なく，極めて単発的であるという傾向を示している。一方八幡川流域及びその周辺においては，佐伯区倉重所在の稗畑遺跡 10)・倉重向山遺跡 11)や，同五日市町所在の下沖 2 号遺跡 12)等から中期に属する土器が出土している。稗畑遺跡及び倉重向山遺跡のように土坑に伴って出土したものもあるが，いずれもその数は多くはない。続く後期になると，広島湾沿岸一帯の丘陵上には多くの集落が営まれるようになる。太田川流域の恵下山遺跡群 13)・大明地遺跡・梨ヶ谷遺跡 14)・毘沙門台遺跡 15)・毘沙門台東遺跡 16)・大町七九谷Ａ地点遺跡 17)・同Ｂ地点遺跡 18)等や，八幡川流域の浄安寺遺跡 19)・下沖 5 号遺跡 20)・稗畑遺跡等が代表的な集落遺跡として挙げられる。これらのうち比較的大規模な集落については，そのほとんどが中期終末頃から営まれ始めており，広島湾頭における集落の丘陵上への進出がこの中期終末の時期にまで遡るものと推測される。

次に，本遺跡と同様の墳墓遺跡について概観してみる。まず，前期にまで遡るものは現在までのところ確認されていない。続く中期に属する例も少なく，太田川流域の佐久良遺跡21)・丸子山遺跡22)・狐ヶ城遺跡 23)・大町七九谷Ｃ地点遺跡 24)及び県史跡牛田の弥生文化時代の墳墓（早稲田神社東斜面遺跡）25)が知られる。これらのうち内陸部に位置する遺跡については，埋葬施設として箱形石棺が主に用いられており，また周辺から集落等が見つかっていないという共通.点がある。後期以降になると，遺跡数は増加する。集団墓と考えられるものには，太田川流域では恵下遺跡 26)・末光Ａ－２地点遺跡 27)・同Ｂ地点遺跡 28)・恵木遺跡 29)・梨ヶ谷遺跡・大久保遺跡 30)・大町矢ヶ谷遺跡 31)・西願
寺遺跡Ａ地点 32)・同Ｃ地点 33)・大町七九谷Ｂ地点遺跡・同Ｃ地点遺跡等が挙げられる。また八幡川流域では，小林遺跡Ｂ地点 34)・平尾遺跡 35)等の事例がある。これら後期に属する遺跡の立地状況については，一般に集落に臨む丘陵上に位置し，日常生活を営む場所からは隔離されている傾向にあり，しかも各墳墓群間においてどの墓も構造や立地にほとんど差のない状態で営まれていることが多いとされている。また埋葬施設としては，土壙墓・土器棺墓・箱形石棺墓等が主に用いられている。そして，大人には土壙墓，幼児・小児には土壙墓や箱形石棺墓，乳児には土器棺墓や箱形石棺墓というように，年齢等による埋葬方法の使い分けが行われていた可能性があることも指摘されている 36)。

ところで，先述した市域内の中期墳墓遺跡についてもう少し詳細に見ていくことにする。まず佐久良遺跡は安佐北区白木町志路に所在し，三篠川に注ぐ小河川栄堂川の南岸の丘陵上に位置している。丘陵尾根上の緩斜面に，大人用・小児用合わせて 10 基の箱形石棺と小児用の石蓋土壙墓 1 基を中心とする墳墓群が確認された。なお本来は，箱形石棺だけでも 20 基程度の規模であったものと推測されている。箱形石棺 6 基に計 9 体分の人骨が残存しており，そのうち 6 体分には赤色顔料の痕跡が認められた。本墳墓群は，墳墓に供献されたものと考えられる土器の形態から，中期後半頃を中心に形成されたものと考えられている。丸子山遺跡は安佐北区三入に所在し，太田川の支流根之

谷川の東岸の丘陵上に位置している。丘陵尾根の先端から中腹にかけての斜面に，大人用・小児用合わせて15基の箱形石棺が確認された。また8体分の人骨が残存していたが，そのうちの1体には赤色顔料が施され，また別の1体には南海産の貝製品が装着されていた。本遺跡は，中期から後期にかけて営まれたものと考えられている。狐ヶ城遺跡は安佐北区亀崎に所在し，太田川と支流の三篠川との合流地点の東岸に位置している。甕及び鉢を伴った土坑1基が確認されており，土器の出土状況や居住地としては不向きな場所に孤立して立地している事等から，墳墓の可能性が考えられている。本遺跡は，出土した土器の特徴から中期後葉の時期とされている。大町七九谷C地点遺跡は，安佐南区大町に所在する。太田川下流の西岸の丘陵尾根上に築かれた墳墓群で，全3群から成っている。そのうちの第1群は，土壙墓12基及び石棺墓3基から構成されており，このうち規模の明らかな石棺墓は小児用と考えられている。調査区内等から出土した土器の特徴から，中期終末頃には形成され始めたものと考えられている。早稲田神社東斜面遺跡は東区牛田早稲田に所在し，太田川河口域を望む丘陵上に位置している。円筒形の土壙墓1基が確認されており，内部からは熟年男性の人骨の一部が出土した。その出土状況から，この被葬者は座位屈葬の埋葬方法がとられていたものと推定されている。土壙墓上面の貝層から出土した土器の特徴から，本遺構は中期後葉頃に形成されたものと考えられている。

以上，弥生時代中期に属する集落及び墳墓遺跡を中心に概観してきたが，それらの調査例はまだ少なく，その実態は不明な点が多い。その糸口を探る上で，この時期にまで遡る墳墓群がまとまって確認された本遺跡の調査成果は，当該地域における弥生時代の墓制を考えるための貴重な事例であるだけではなく，広島市全域の状況を捉える上での新たな資料を提供したものと言えるであろう。

注

1）財団法人広島市文化財団『成岡A地点遺跡発掘調査報告』2001年

2）広島市役所『瀬野川町史』1980年

3）広島県『広島県史』考古編　1979年

4）広島市役所『新修広島市史』第一巻総説編　1951年

5）禅昌寺西遺跡発掘調査団『禅昌寺西遺跡発掘調査報告』1980年

6）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大明地遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』1987年

7）広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告』1983年

8）注3）に同じ

9）財団法人広島市歴史科学教育事業団『牛田早稲田遺跡発掘調査報告』1994年

10）財団法人広島市歴史科学教育事業団『稗畑遺跡発掘調査報告』1992年

11）財団法人広島市歴史科学教育事業団『倉重向山遺跡発掘調査報告』1991年

12）財団法人広高市歴史科学教育事業団『下沖2号遺跡発掘調査報告』1994年

13）広島県教育委員会「恵下山遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977年

14）財団法人広島市歴史科学教育事業団『梨ケ谷遺跡発掘調査報告』1998年

15）未報告のため詳細は不明である。

16）広島市教育委員会『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』1990年

17）財団法人広島市文化財団「大町七九谷Ａ地点遺跡」『大町七九谷遺跡群発掘調査報告』1999年

18）財団法人広島市文化財団「大町七九谷Ｂ地点遺跡」『大町七九谷遺跡群発掘調査報告』1999年

19）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「浄安寺遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』1986年

20）広島市教育委員会「下沖５号遺跡」『一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』1988年

21）広島市教育委員会『佐久良遺跡発掘調査報告』1984年

22）石田彰紀「丸子山遺跡」『日本考古学年報』1978年

広島市『中山村史』1991年

23）広島県教育委員会「狐ヶ城遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977年

24）財団法人広島市文化財団「大町七九谷Ｃ地点遺跡」『大町七九谷遺跡群発掘調査報告』1999年

25）潮見浩「山陽地方における弥生時代の墓制－広島県発見の３例を中心として－」『古代学』第八巻第二号1959年

注4）に同じ

26）広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『恵下遺跡発掘調査概報』1980年

27）広島市教育委員会「末光Ａ－２地点遺跡」『末光遺跡群発掘調査報告』1984年

28）広島市教育委員会「末光Ｂ地点遺跡」『末光遺跡群発掘調査報告』1984年

29）恵木遺跡発掘調査団『恵木遺跡発掘調査報告』1982年

30）財団法人広島市歴史科学教育事業団『大久保遺跡発掘調査報告』1992年

31）矢ヶ谷遺跡発掘調査団『矢ヶ谷遺跡発掘調査報告』1984年

32）広島県教育委員会『西願寺遺跡群』1974年

33）注32）に同じ

34）広島市教育委員会「小林遺跡Ｂ地点」『小林遺跡Ａ・Ｂ地点遺跡発掘調査報告』1990年

35）財団法人広島市歴史科学教育事業団『平尾遺跡発掘調査報告』1994年

36）注10）に同じ

Ⅲ　遺構と遺物

１．調査の概要

本遺跡は，天狗防山から北西方向に伸びる尾根の途中に立地しており，調査区域の南端で標高約80ｍ，北端で同じく約73.8ｍである。調査区の周囲は，北側はなだらかに下る自然地形が比較的残されているが，東西及び南側は後世の削平を大きく受けている。調査区内の中央にはほぼ南北方向に里道が通っており，これを挟んで東側調査区及び西側調査区と便宜的に分けて調査を行った。東側調査区では明確な遺構は確認されず，弥生土器・須恵器及び鉄器（斧）がわずかに出土したのみである。西側調査区では，区域内を６つの調査区に区分し，遺構面までの掘り下げを行った。調査の結果，区域内南半の標高77～78ｍ付近を中心に土壙墓13基（ＳＴ１～13），土器棺墓３基（ＳＰ１～３），土器蓋土壙墓１基（ＳＰ），土坑１基（ＳＫ１）及びテラス状遺構１か所（ＳＸ１）をそれぞれ確認した。遺物は，遺構内及びその周辺から弥生土器・須恵器・鉄器（斧）及び石器（斧）が出土した。

２．遺構

⑴　墳墓群

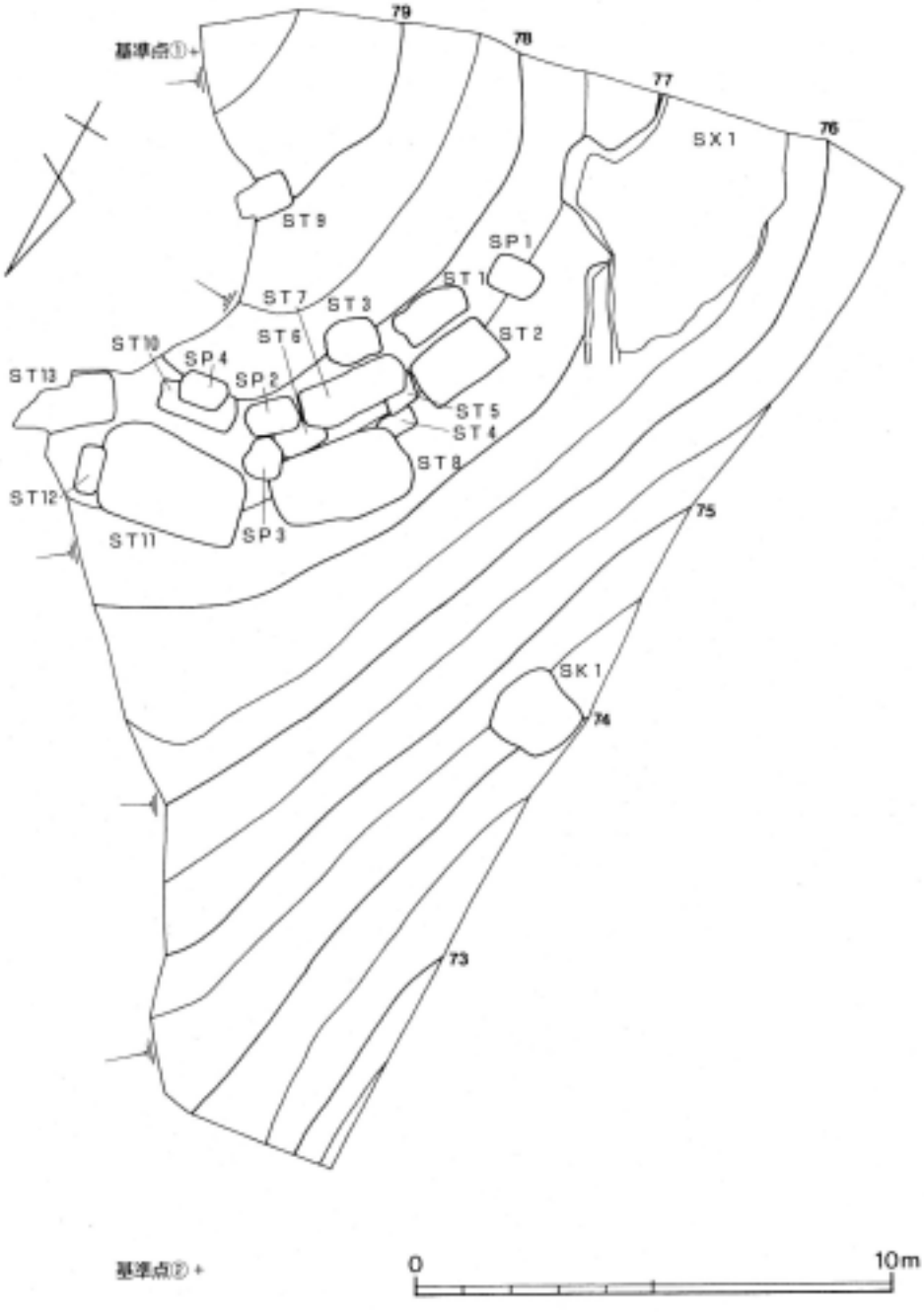
〇土壙墓

ＳＴ１（第５図）

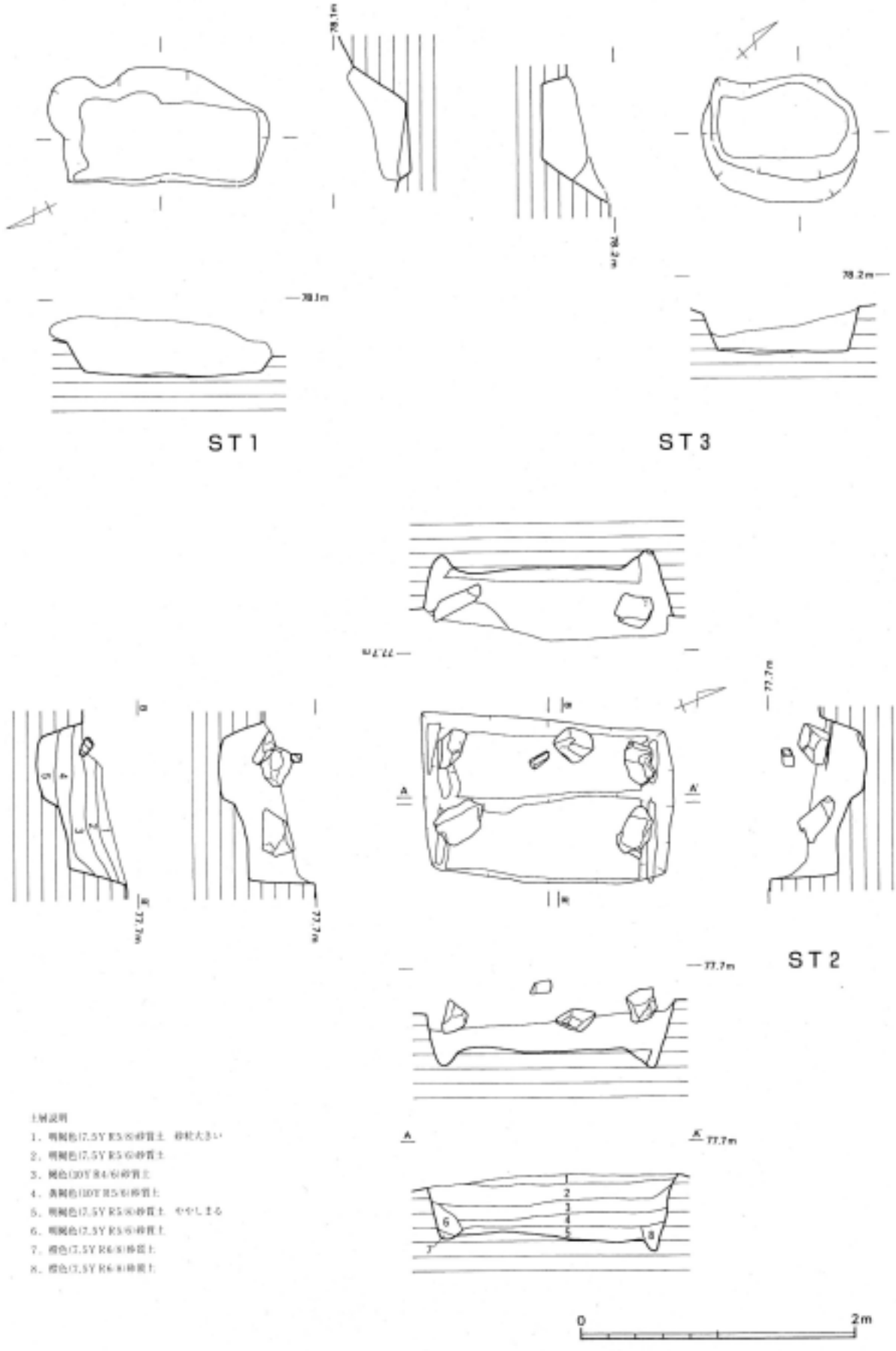
西向き斜面の標高77，５ｍ付近に位置する。掘り方の上端は，斜面側である東側にふくらんだいびつな長方形を呈し，規模は長辺約150㎝×短辺約80㎝である。底面の規模は長辺約129㎝×短辺約49cmで，深さは最大で約40cmである。長軸はＮ25°Ｅを指向する。木棺の痕跡は確認できなかった。底面の短辺が南側よりも北側で約10cm長く，また底面レヴェルが南側よりも北側が高いことから，頭位は北側と考えられる。本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

ＳＴ２（第５図）

ＳＴ１の北西約30㎝に位置する。掘り方の上端は長方形を呈し，規模は長辺約180㎝×短辺約112cmである。長軸はＮ21°Ｅを指向する。底面は，長軸ほぼ中央を境に東西の２段に分かれており，東側の段の方が西側の段よりも中央部分で約22㎝高い。土層の観察から，２基の土壙墓が重複している状況とは考えられず，当初から２段底面を持った形態であったと考えられる。底面の長辺はともに約160㎝で，短辺は東段が北側で約54㎝，南側で約40cm，西段が北側で約38cm，南側で約44cmである。深さは東段が最大で約49㎝，西段が最大で約70㎝である。また底面両段の小口部分には，それぞれ一対の掘り込みが確認された。その規模は，東段北側が長さ約57cm×幅約７㎝×深さ約９㎝，同じく南側が長さ約39cm×幅約６㎝×深さ約13㎝，また西段北側が長さ約29cm×幅約10cm×深さ約６㎝，同じく南側が長さ約42cm×幅約7cm×深さ約15㎝である。これらの掘り込みは小口板を立てるための溝と考えられ，本遺構には底面に立てた小口板に側板を添える形式の木棺が使用され



第４図　成岡Ｂ地点遺跡遺構配置図（Ｓ＝１：50）



第５図　ＳＴ１・ＳＴ２・ＳＴ３実測図（Ｓ＝１：40）

ていたと考えられる。木棺の規模は，東段が長さ約140㎝×幅約53cm，西段が長さ約135c皿×幅約41㎝と推定される。ところで，東段の小口溝は北側が長くて南側が短く，反対に西段では北側が短くて南側が長い。また底面の平面形についても，それに合わせて東段では北側の方が幅が広く，西段では南側の方が幅が広い。人体を寝かせた場合に最も幅広くなるのは肩の部分であることから，東段では北側に肩つまり頭位を向け，西段では逆に南側が頭で北側に足という埋葬方向が考えられる。なお本遺構の埋土中からは，礫が6個検出された。いずれも底面からは浮いた状態で，しかもそのうち4個はそれぞれ上下段の小口溝の直上に規則正しく乗っていた。各礫の沈み方を見ると，底面の深さの違いにもかかわらずほぼ同じ深さまで沈んでいることから，これらの礫は墓標として置かれていたものと考えられる。本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

ＳＴ３（第５図）

ＳＴ１の北東約30cmに位置する。掘り方の上端は現状ではいびつな楕円形を呈するが，本来は長方形と考えられる。規模は長辺約114cm×短辺約85㎝である。底面の規模は長辺約94cm×短辺約51㎝で，深さは最大で約60㎝である。長軸はＮ39°Ｅを指向する。木棺の痕跡は確認できなかった。また底面の最大幅を示す位置が北側に偏っていることから，頭位は北側と考えられる。本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

ＳＴ４（第６図）

ＳＴ２の北約50㎝に位置する。北東側はＳＴ８に，また南側側面の一部はＳＴ５にそれぞれ切られている。掘り方は長方形を呈すると推定され，現存規模は上端で長辺約98cm×短辺約36㎝である。底面の規模は長辺約70㎝×短辺約26㎝で，北東から南西に向かってわずかに傾斜しており，深さは中央部で約11cmである。長軸はＮ28°Ｅを指向する。木棺の痕跡は確認できなかった。頭位については不明である。本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

ＳＴ５（第６図）

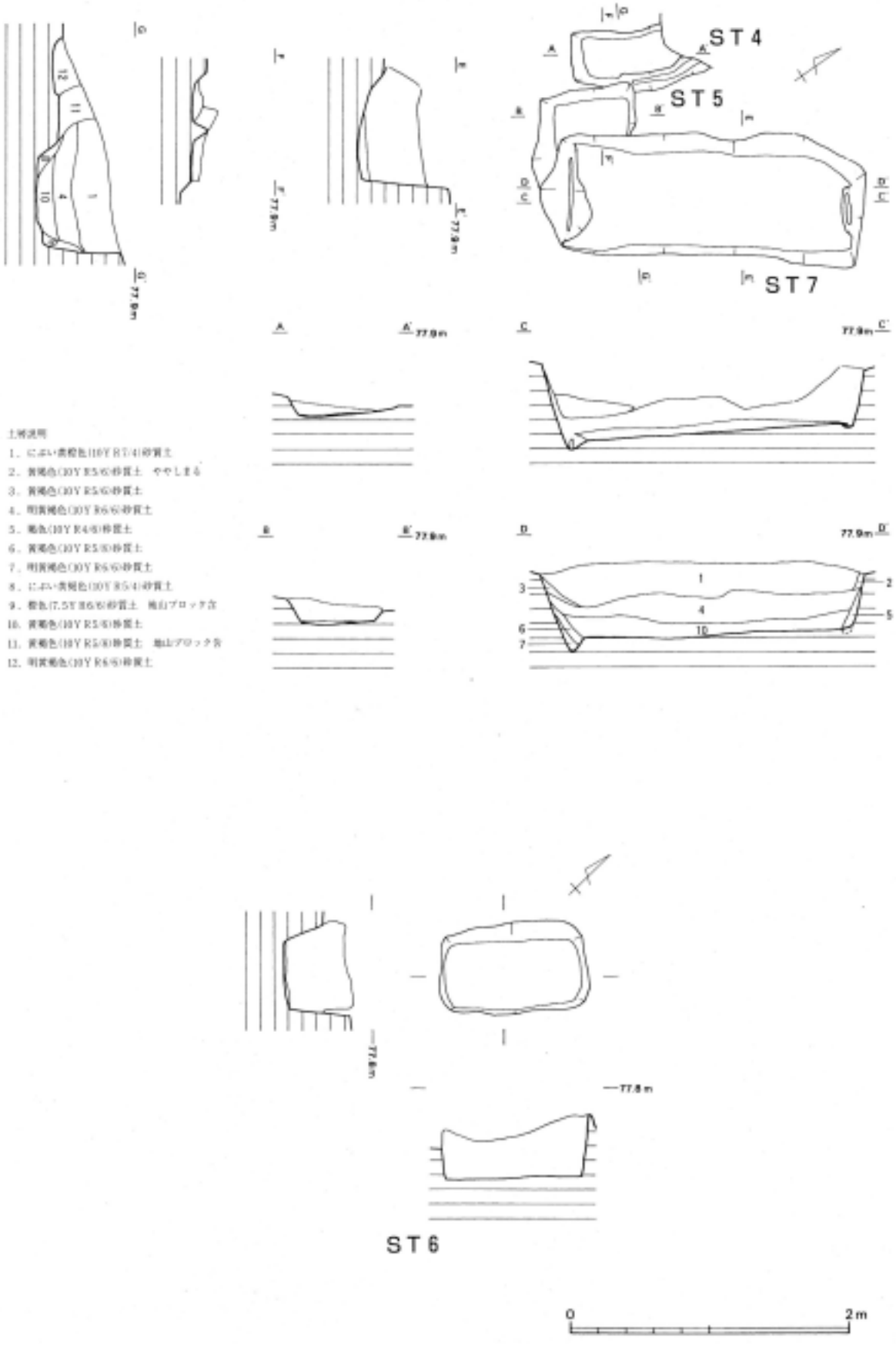
ＳＴ４の東側に隣接する。東側側面はＳＴ７に切られている。掘り方は長方形を呈すると推定され，現存規模は上端で長辺約68cm×短辺約32㎝である。底面の規模は長辺約52cm×短辺約24cmで，深さは最大で約17㎝である。長軸はＮ29°Ｅを指向する。木棺の痕跡は確認できなかった。底面レヴェルが南側よりも北側が高いことから，頭位は北側と考えられる。本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

ＳＴ６（第６図）

ＳＴ５の北東約140㎝に位置する。南東側はＳＰ２及びＳＴ７に切られている。掘り方は長方形を呈すると推定され，現存規模は上端で長辺約106cm×短辺約62㎝である。底面の規模は長辺約97㎝×短辺約46㎝で，深さは最大で約46cmである。長軸はＮ44°Ｅを指向する。木棺の痕跡は確認できなかった。底面レヴェルが南側よりも北側が高いことから，頭位は北側と考えられる。本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

ＳＴ７（第６図）

ＳＴ３の北西約10cmに位置する。北東側でＳＴ６を，また南西側でＳＴ５をそれぞれ切っている。掘り方の上端は長方形を呈し，規模は長辺約230㎝×短辺約80㎝である。底面の規模は長辺約200cm



第６図　ＳＴ４・ＳＴ５・ＳＴ６・ＳＴ７実測図（Ｓ＝１：40）

×短辺約62㎝で，北東から南西に向かってわずかに傾斜しており，深さは中央部で約64㎝である。長軸はＮ37°Ｅを指向する。底面の小口部分には，一対の掘り込みが確認された。その規模は，北東側が長さ約22cm×幅約４cm×深さ約４㎝，南西側が長さ約52㎝×幅約２cm×深さ約８㎝である。これらの掘り込みは木棺材の小口板を立てるための溝と考えられ，本遺構には底面に立てた小口板に側板を添える形式の木棺が使用されていたと考えられる。木棺の規模は，長さ約182㎝×幅約36㎝と推定される。底面の短辺が北側よりも南側で約10㎝長いが，底面の深さは南側よりも北側が浅く，頭位は北側と考えられる。本遺構の埋土中から弥生土器片（第12図1）が出土したが，遺構に伴う遺物とは考えられない。

ＳＴ８（第７図）

ＳＴ７の北西約30㎝に位置する。南側でＳＴ４を切っており，また北東側はＳＰ３に切られている。掘り方の上端は長方形を呈し，規模は長辺約290cm×短辺約156cmである。底面の規模は長辺約256㎝×短辺約98㎝で，深さは最大で約86㎝である。長軸はＮ41°Ｅを指向する。土層観察によって木棺の使用が確認でき，その規模は長さ約218㎝×幅約60㎝と推定される。底面レヴェルが南側よりも北側が高いことから，頭位は北側と考えられる。本遺構の埋土中から弥生土器片（第12図2）が出土したが，遺構に伴う遺物とは考えられない。

ＳＴ９（第７図）

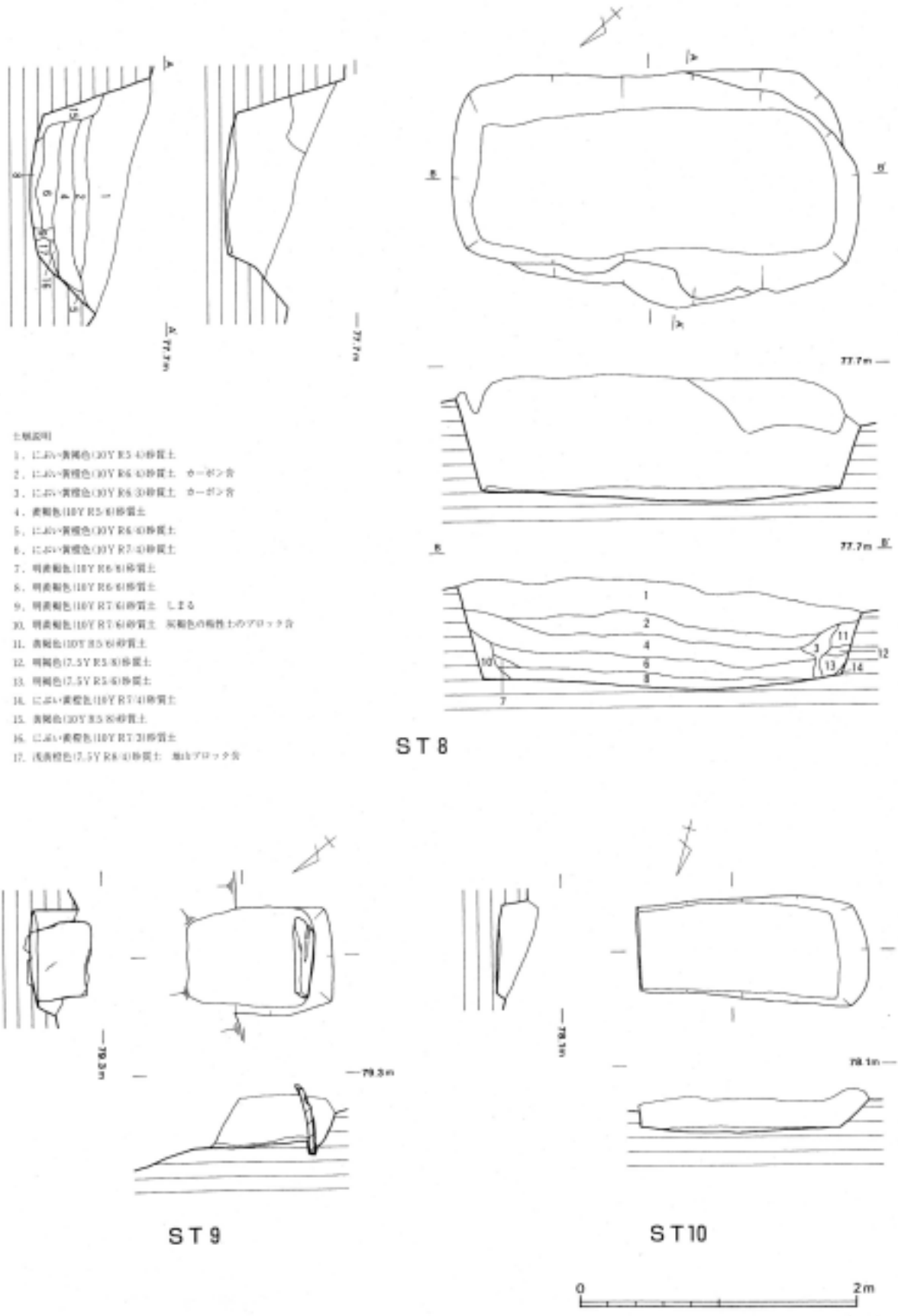
ＳＴ３の南東約2.6ｍに位置し，標高77.5ｍ付近に密集している他の墳墓群から1.5ｍほど高所に単独で立地している。本遺構の北東側は大きく削平されている。掘り方は長方形を呈すると推定され，現存規模は上端で長辺約126cm×短辺約72㎝である。底面の規模は長辺約108㎝×短辺約66㎝で，深さは最大で約34cmである。長軸はＮ38°Ｅを指向する。残存する南西側底面の小口側には，長さ約48cm×幅約58㎝×厚さ約４㎝のやや湾曲した板状の礫が立てられている。これは，納められた木棺の小口板を押さえるためのものと考えられる。なお，削平された北東側において，北東側小口にあたると考えられる位置にも礫が存在した。その礫は倒れており，原位置を保っていないものの，同じ目的を持っていたものと考えられる。頭位については不明であるが，北東側に使用された石材の方が大きいことから，北東方向の可能性がある。本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

ＳＴ10（第７図）

ＳＴ９の北約318ｍに位置する。南側はＳＰ４に切られている。掘り方の上端は長方形を呈し，規模は長辺約166cm×短辺約66cmである。底面の規模は長辺約143㎝×短辺約61㎝で，深さは最大で約22cmである。長軸はＮ75°Ｅを指向する。木棺の痕跡は確認できなかった。底面の短辺が東側よりも西側で約８㎝長いことから，頭位は西側と考えられる。本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

ＳＴ11（第８図）

ＳＴ10の北約40cmに位置する。東側はＳＴ12に切られている。掘り方の上端は長方形を呈し，規模は長辺約308㎝×短辺約180cmである。底面の規模は長辺約259㎝×短辺約66㎝で，深さは最大で約114㎝である。底面の中央部には長辺約170cm×短辺約50㎝×深さ約６cmの窪みが見られる。長軸はＮ80°Ｅを指向する。土層観察によって木棺の使用が確認でき，その規模は長さ約166cm×幅約50㎝と推定される。底面中央の窪みは，その木棺を安定させるためのものと思われる。底面の短辺が



第７図　ＳＴ８・ＳＴ９・ＳＴ10実測図（Ｓ＝１：40）

西側よりも東側で約20㎝長いことから，頭位は東側と考えられる。木棺の裏込め土中から弥生土器片（第12図3）が出土したが，遺構に伴う遺物とは考えられない。

ＳＴ12（第８図）

ＳＴ11の東側に隣接する。西側でＳＴ11を切っている。掘り方の上端は長方形を呈し，規模は長辺約96㎝×短辺約50㎝である。底面の規模は長辺約79㎝×短辺約44cmで，長軸方向でわずかに湾曲しており，深さは中央部で約20cmである。長軸はＮ16°Ｗを指向する。木棺の痕跡は確認できなかった。底面の短辺が北側よりも南側で約10㎝長いことから，頭位は南側と考えられる。本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

ＳＴ13（第８図）

ＳＴ12の南東約90㎝に位置する。本遺構の北東側は大きく削平されている。掘り方は長方形を呈すると推定され，現存規模は上端で長辺約130㎝×短辺約104cmである。底面の規模は長辺約184㎝×短辺約57cmで，深さは最大で約47㎝である。長軸はＮ53°Ｅを指向する。底面には，壁面に沿って幅10cm程度の掘り込みが確認された。この掘り込みは，小口板及び側板を立てるための溝と考えられ，本遺構には小口扱と側板をそれぞれ埋め込む形式の木棺が使用されていたと考えられる。木棺の規模は，幅は約55omと推定されるが長さは不明である。頭位については，掘り方の短辺が西側よりも東側で長いと考えられることから，東側と推定される。本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

〇土器棺墓

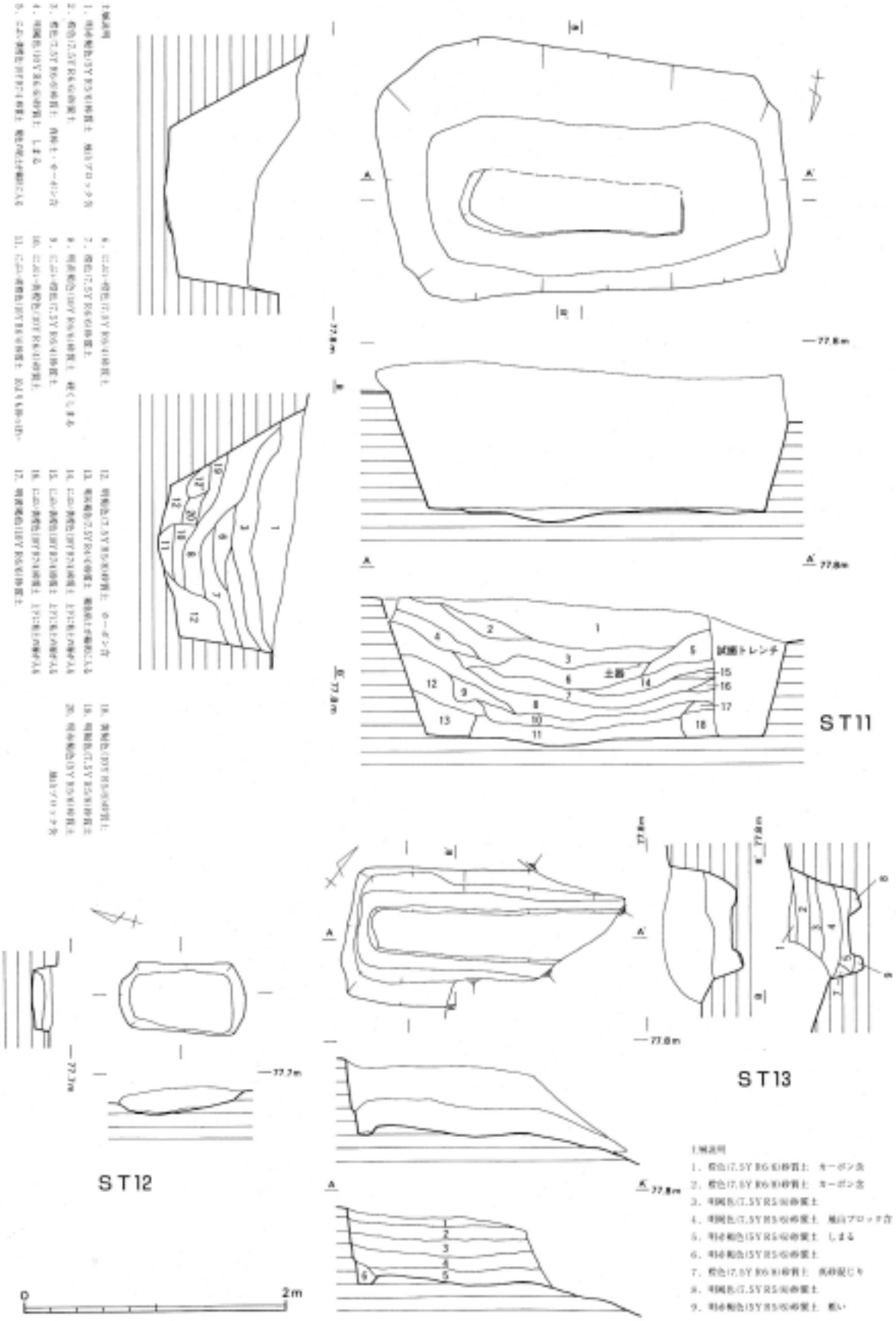
ＳＰ１（第９図）

ＳＰ１は，ほぼ完形の壺形土器１個体を用いた土器棺墓である。ＳＴ１の南西約50㎝に位置している。掘り方の上端は長方形を呈し，規模は長辺約100cm×短辺約77㎝で，深さは最大で約45cmである。掘り方の長軸はＮ86°Ｅを指向しており，等高線に対してほぼ直角に，斜面の傾斜に沿う形で築造されている。この土壙のほぼ中央に，壺形土器（第11図4）が口を少し北西側に傾けて立った状態で据えられていた。土器の底部は穿孔されている。また土壙の底面のほぼ中央は，底面径約7.5㎝のすり鉢状に掘り込まれており，土器は本来この窪みに納められて直立していたものと考えられる。このように，土器が土壙に据えられた状況であることや，土器の底部に穿孔が施されていること，また福山市吹越遺跡弥生第２号土壙1)や府中市山の神墳墓群ＳＫ152)等に同様な土器を用いた土器棺墓の例があることから，本遺構も土器棺墓と考えている。なお，本遺構の性格に関する情報を得る目的で土器内の土壌理化学分析（リン分析）を実施したが，遺体を埋納していた痕跡は確認されなかった。

本土器棺墓は，棺身の大きさから乳幼児用と考えられる。また相内及び土横内からは，遺物は出土しなかった。

ＳＰ２（第９図）

ＳＰ２は，ほぼ完形の壺形土器１個体を用いた土器棺墓である。ＳＴ６とＳＴ10の間に位置しており，しかもその掘り方はＳＴ６を一部切って構築されている。なお，土器の口縁部分はかなり原形が損なわれており，またその一部が本遺構から少し離れた場所で検出されていることから，本遺構は後世の撹乱を受けている可能性も考えられる。掘り方の上端は楕円形を呈し，規模は長径約112



第８図　ＳＴ 11・ＳＴ 12・ＳＴ 13 実測図（Ｓ＝１：40）

㎝×短径約75㎝で，深さは最大で約35cmである。掘り方の長軸はＳ56°Ｗを指向する。また底面の南西端側は約7㎝ほどの深さで一一段掘り込まれており，その部分に棺の口縁部及び蓋石を据えつけて安定を保つように工夫されている。この掘り方に，複合口縁の壺形土器（第11図5）を，口をほぼ南西方向に向けて水平に横たえて棺としている。棺の口の部分には，長さ約41㎝×幅約29㎝×厚さ約14㎝と長さ約27㎝×幅約21㎝×厚さ約7㎝の扁平な河原石2個が蓋をする形で立てられている。棺の胴部の直上には，縦約52cm×横約46㎝×厚さ約17cmの角礫が確認された。この角礫は，安置された土器の胴部分が圧迫されて窪んでいる状況から考えて，本土器棺墓の標石として築造当初から設置されていた可能性が高い。

本土器棺墓は，棺身の大きさから乳幼児用と考えられる。また棺内及び土壙内からは，遺物は出土しなかった。

ＳＰ３（第９図）

ＳＰ３も，ほぼ完形の複合口縁の壺形土器1個体を用いた土器棺墓である。ＳＰ２の北側に隣接しており，その掘り方はＳＰ２の掘り方によってわずかに切られている。また本土器棺墓によって，ＳＴ６及びＳＴ８が切られている。掘り方の上端はいびつな円形を呈し，規摸は直径約80cmで，深さは最大で約38㎝である。底面の中央部には楕円形の掘り込みがあり，曲面体の棺身を安定して設置できるように工夫されている。棺には，口縁部を打ち欠き，底部に穿孔を施した大型の壺形土器（第11図6）の胴部が水平に横たえて用いられている。打ち欠かれた口縁部はさらに割られ，二方は胴部と土壙との隙間に挟み込んで棺身の安定を図り，またもう一方は穿孔された底部に外から蓋をする形で被せてあった。頸部は，長さ約52㎝×幅約45cm×厚さ約13cmの扁平な礫の平滑面を使用して，ぴったりと塞がれていた。この蓋石に使用された立石は，横たえた土器を埋め戻した場合約20cm程度地表面上に出ると考えられ，標石としての役割を併せ持っていた可能性も考えられる。

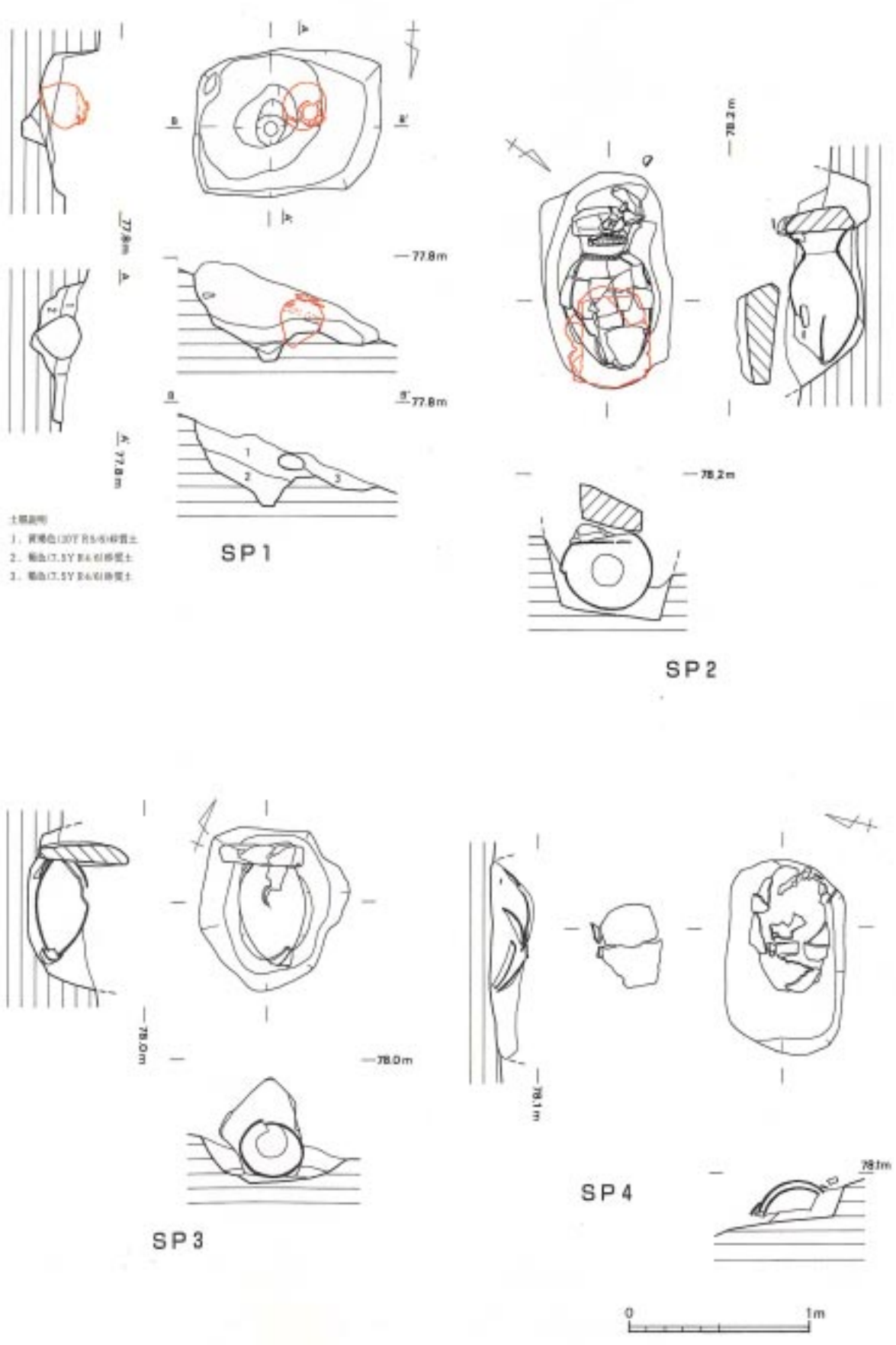
本土器棺墓は，棺身の大きさから乳幼児用と考えられる。また相内及び土横内からは，遺物は出土しなかった。

〇土器蓋土壙墓

ＳＰ４（第９図）

ＳＰ４は，壺形土器ほぼ1個体分の破片を用いた土器蓋土壙墓である。ＳＰ２の東約50㎝に位置しており，その掘り方はＳＴ10を切っている。掘り方の北側の部分は流失しており，現状では南側の壁面と長径約90㎝×短径約60㎝の楕円形の底面とが残されている。深さは最大で約17㎝である。用いられている土器（第11図7）は複合口縁の壺形土器と考えられるが，口縁部は未確認である。蓋の構造としては，まず遺体の上に土器の胴部上半部の2破片を伏せ，次にその上に大型の破片を被せて，最後に小型の破片を土器の合わせ目や隙間に重ねて置いている。各土器片は全て表面を上側に向け，全体としてドーム状を成している。

この土器蓋は約66cm×約45omの範囲を覆っており，この規模から乳幼児用と考えられる。また土器蓋内及び土横内からは，遺物は出土しなかった。



第９図　ＳＰ１・ＳＰ２・ＳＰ３・ＳＰ４実測図（Ｓ＝１：30）

(2) 土坑（第10図）

ＳＫ１は，ＳＴ８の北西約４ｍに位置している。西向き斜面に掘り込まれており，上縁部の平面形は不整形であるが，底部は直径110㎝内外のいびつな円形を呈している。深さは南東側の最深部で約154cmである。底面のやや上方から炭化物を確認したものの，本遺構の性格に関しては明らかにできなかった。ただし，東区の県史跡牛田の弥生文化時代の墳墓（早稲田神社東斜面遺跡）3)や安佐北区末光Ｂ地点遺跡4)では円筒形の土壙墓が確認されており，本遺構も墳墓の可能性が考えられる。なお埋土中から弥生土器（第12図8）が出土したが，底面から90㎝以上浮いた状態であり，また同一個体の破片が本遺構の北東上方の斜面から出土していることから，この土器は遺構に伴うものではなく，本遺構がほぼ埋まった後に流れ込んだと考えられる。この土器は，その形態から弥生時代中期後半に属すると考えられる。

(3) テラス状遺構（第10図）

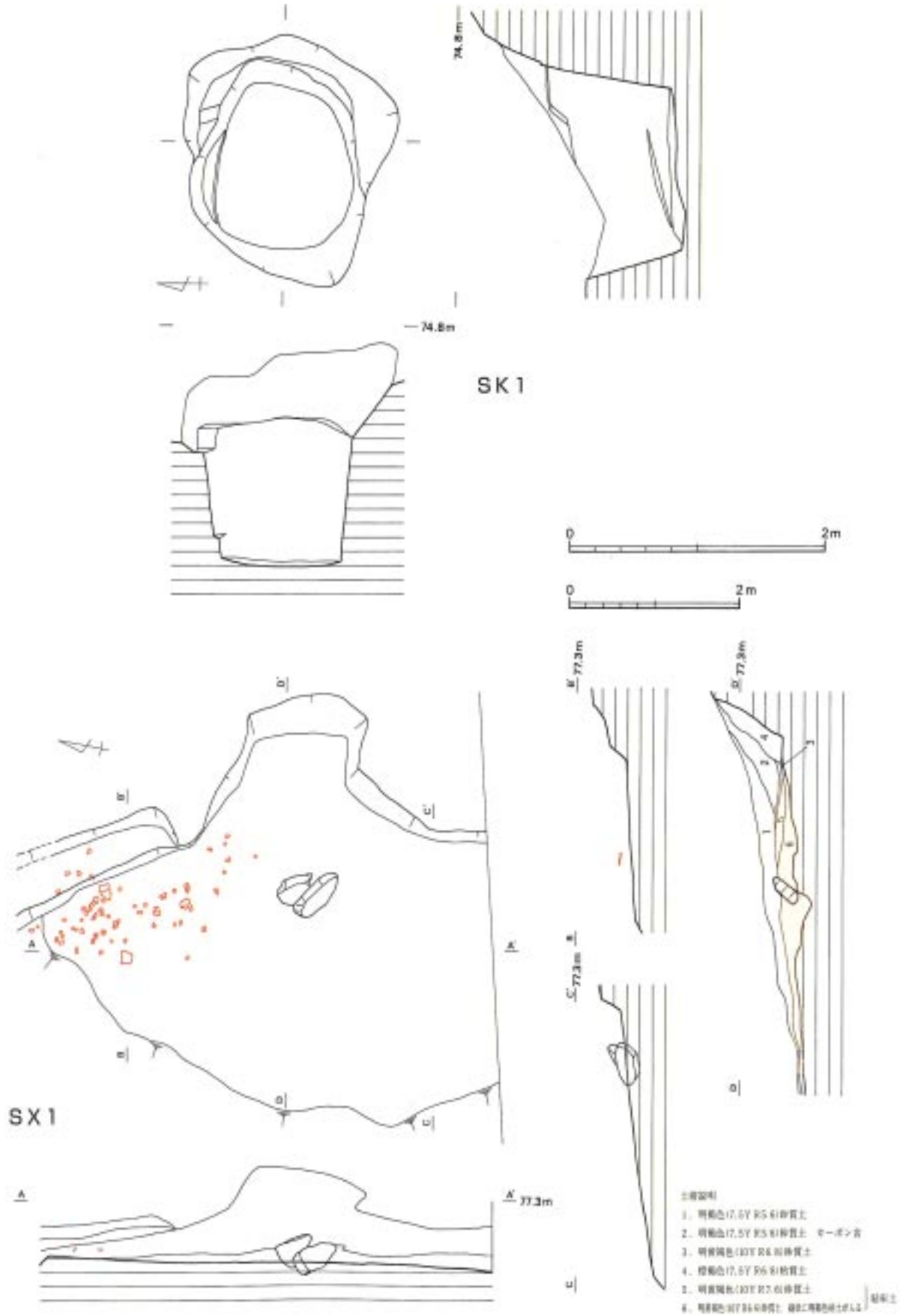
ＳＸ１は，ＳＰ１の南西約1.5ｍに位置している。調査区の南西隅にあたり，西向きの斜面を最大で約80cm掘り込んで平坦面を造りだしている。本遺構の西側は斜面のために流失している。また南側の状態は調査区外のため明らかではないが，地形観察によると平坦面がさらに続いているようである。現状での規模は，最大幅で南北約5.4ｍ，東西約4.5ｍである。床面には地山上に最大で厚さ約30cmの貼床が施されている。さらにこの貼床を行うにあたって，床面の中央付近に，扁平な石材２個が下部を床に埋め込んだ状態で立てられている。この立石のうち北側のものは角礫，南側のものは河原石である。

また本遺構の北側の一角からは，多数の土器片が約３ｍ×約1.5ｍの範囲に散らばった状態で出土した。これらの土器片は，一部については床面から浮いたものがあるものの，ほぼ同じレヴェルで広がっており，また同一個体として接合できるものもいくつか含まれていた（第12図９～11）。こうした状態から，土器をその場で意識的に破砕し投棄したことが想像される。なおこれらの土器は，その形態から弥生時代中期後半に属すると考えられる。

本遺構の性格を明確に示す痕跡は確認されなかった。しかし，先述した墳墓群と同じ等高線上に位置し，しかも墳墓群をやや見上げる場所に隣接して設けられていることや，意図的な行為が連想される土器片の出土状況等からすると，本遺構はこれらの墳墓群に対する何らかの葬送儀礼が行われた場所であったことが推測される。

３．遺物

出土遺物には，弥生土器・石器・鉄器がある。このうち遺構に伴うのは，３基の土器棺墓と１基の土器蓋土壙墓に使用された土器に限られる。ＳＸ１出土土器は何らかの目的で廃棄されたものと考えられ，厳密な意味では伴うものとは言い切れない。土壙墓の埋土中から出土したものは構築時に紛れ込んだものであり，ＳＫ１埋土中出土土器も流れ込んだと考えられる。そのほか図示した遺物については，調査区内から出土したものである。なお，土器の詳細については土器観察表を参照



第10図　ＳＫ１・ＳＸ実測図（ＳＫ１はＳ＝１：40，ＳＸ１はＳ＝１：60）

されたい。

(1) 土器（第11・12図1～13）

3基の土器棺墓のうち，ＳＰ２に使用された複合口縁の壺形土器（５）については，平成11年度に調査した成岡Ａ地点遺跡ＳＸ２土器だまりから出土した土器5）と口縁部における施文の違いこそあれ，胴部のプロポーションや擬口縁部が長く大きく拡くといった特徴からみて，類似するものである。この成岡Ａ地点遺跡ＳＸ２土器だまり出土の複合目縁の壺形土器は，共伴した土器の特徴から，上深川Ⅲ式古段階（妹尾周三氏による安芸地域編年Ⅲ－ａ6)）と位置付けられる。時期は庄内式古段階併行と考えられ，弥生時代終末から古墳時代初頭に位置付けられていることから，このＳＰ２に使用された土器についても同様な時期と考えられる。また，ＳＰ３に使用された複合口縁の壺形土器（６）は，体部は長胴形を呈し，なで肩であること，口縁部はあまり外反せず，複合部の立ち上がりも短い。こうした器形的特徴は型式学的に，ＳＰ２に使用された土器よりも古い様相を呈していると考えられる。時期は後期後半頃と考えられる（安芸Ⅴ－４様式7)併行の時期まで遡るか？)。なお，わずかながら確認された遺構の切り合い関係からも，ＳＰ２の掘り方がＳＰ３の掘り方を切っている。土器蓋土壙墓であるＳＰ４に使用された土器（７）は口縁部が欠損しているものの，複合口縁の壺形土器によく見受けられる頸部に刻目凸帯を有することから，この土器も複合目縁を呈すると考えられる。この土器の時間的な位置付けは，体部の形態，底部がほぼ丸底化していることなどから，ＳＰ２に使用された土器とほぼ同時期と考えられる。

ところで，ＳＰ１に使用された土器（４）については，前述のとおり福山市吹越遺跡第２号土壙出土の土器及び府中市山の神墳墓群ＳＫ15に土器棺として使用された土器に類似する。頸部における凸帯の有無に違いがあるものの，内面の削りの範囲は底部から１／３以下であることから，これらとほぼ同時期と見なしてよいと考える。これらは中期末葉に位置付けられており（備後Ⅳ－２様式8)），ＳＰ１に使用された土器についても，中期末葉に位置付けられる。

以上のことから，遺構に伴う土器については，中期に遡り他の土器棺墓と様相を異にするＳＰ１を除き，ＳＰ２～ＳＰ４はいずれも弥生時代後半から終末に位置付けられる。

そのほかの出土した土器を見てみると，ＳＴ７・ＳＴ８・ＳＴ11の埋土中から出土した土器のうち，ＳＴ７から出土した土器（１）は高坏と考えられる。このような形態の高坏は，安芸区瀬野井原遺跡9)からほぼ完形品が出土しており，器形を窺い知ることができる。口縁上部に三条の凹線紋が見られ，高さの低い脚部が付き，こうした器形の高坏は中期末葉と見なすことができる（安芸Ⅳ－２様式〕。ＳＴ８から出土した（２）についても同器形と考えられる。なお，ＳＴ11から出土した（３）は甕であるが，調査区内から出土した（12）や（13）と同様，口縁端部の拡張が見られない。これらは後述するＳＸ１から出土した甕よりも型式的に古い様相を呈し，中期後葉頃と考えられる（安芸Ⅳ－１様式)。

ＳＸ１から出土した甕のうち，ほぼ完形に復元された（９）については，二条の凹線紋を施す口縁部は「く」の字状に大きく横方向に外反し，胴部が大きく張るものの，頸部はあまり締まらない形態的特徴は中期末葉に位置付けられる（安芸Ⅳ－２様式)。そのほかの（10)・(11）も口縁部の

破片であるが，同様な時期と考えてさしつかえないであろう。

またＳＫ１から流れ込みの状態で出土した鉢（８）については，内湾した胴部から口縁部が反転し，強く外反したもので，胴部最大径が頸部直下に見られるものであるが，中期末葉に位置付けられる（安芸Ⅳ－２様式）。

このことから，ＳＰ２～ＳＰ４を除き，ＳＰ１やＳＸ１のほか，調査区内から出土した土器について言えば，一部中期後葉まで遡るもの（３・12・13）が含まれるが，大半は中期末葉に位置付けられる。このことから，これらの土壙墓群の形成開始時期は，中期後葉，遅くとも中期末葉頃と考えられる。

(2)　石器（第 12 図 14）

蛤刃石斧が調査区内ＳＴ１の東側から出土している。その傍からは土器（12）も出土した。長さ 16.3cm，刃幅 6.1 ㎝，厚さ 5.15cm である。重さは 847.2 ｇである。砂岩質である。

(3)　鉄器（第 12 図 15・16）

いずれも鉄斧である。調査区内から出土している。いずれも刃部が摩耗しているが，片刃である。（15）は，長さ 7.6 ㎝，刃幅 3.0 ㎝，厚さ 0.45 ㎝である。重さは 41.1 ｇである。（16）は，長さ 7.6 ㎝，刃幅 3.3 ㎝，厚さ 0.5cm である。重さは 93.4 ｇである。

注

1）広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センタｒ『石槌山古墳群』1981 年

2）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山の神遺跡群・池ノ迫遺跡群』1998 年

3）潮見浩「山陽地方における弥生時代の墓制－広島県発見の３例を中心として－」『古代学』第八巻第二号 1959 年

広島市役所『新修広島市史』第一巻総説編　1961 年

4）広島市教育委員会「末光Ｂ地点遺跡」『末光遺跡群発掘調査報告』1984 年

5）財団法人広島市文化財団『成岡Ａ地点遺跡発掘調査報告』2001 年

6）妹尾周三「広島県の弥生後期土器」『瀬戸内の後期土器の編年と地域性』1990 年

7）妹尾周三「安芸地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社　1992 年

以下，安芸地域の編年は，妹尾氏の様式編年による。

8）伊藤実「備後地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社　1992 年

9）広島市役所『瀬野川町史』1980 年.

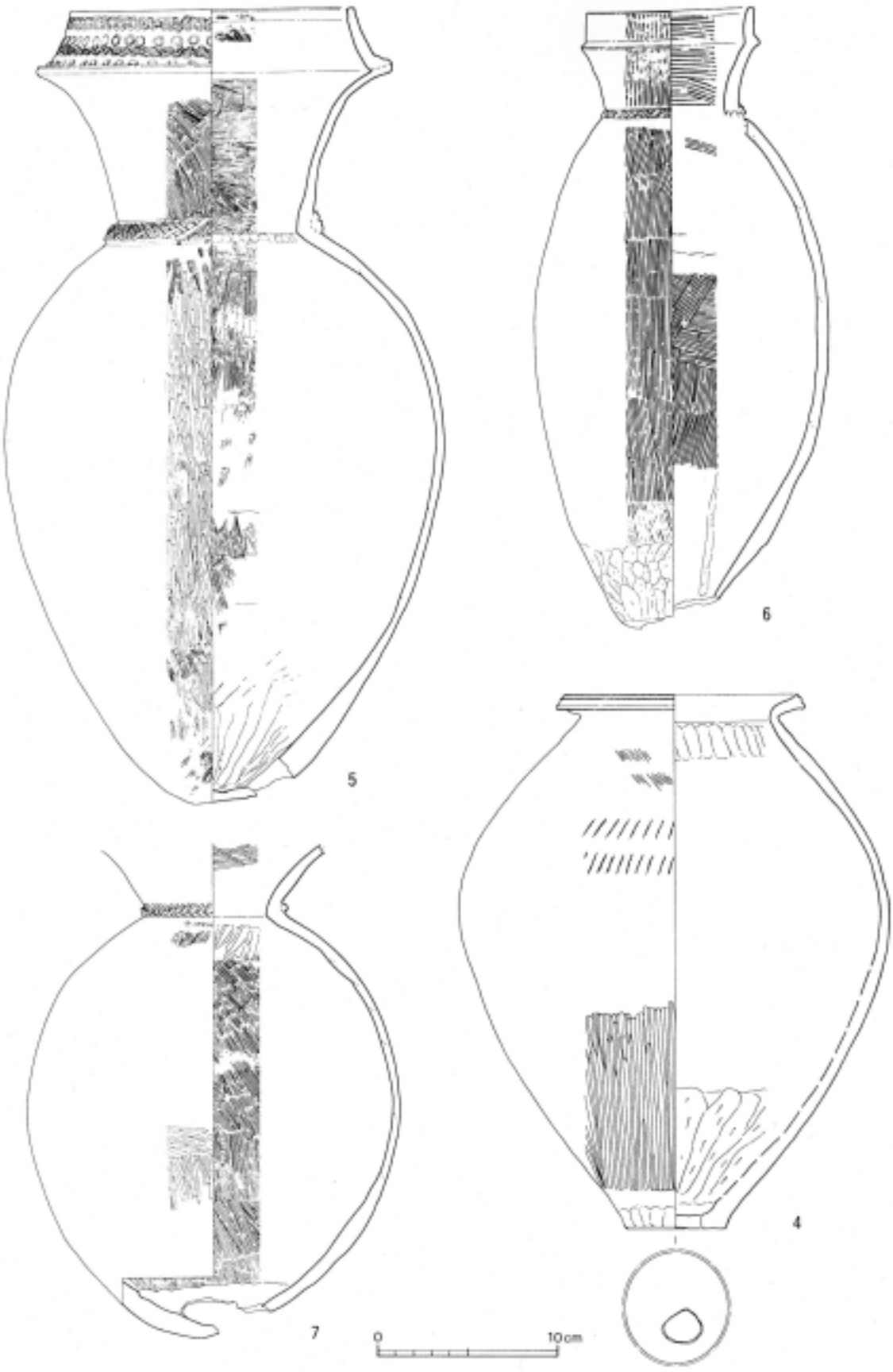
土 器 観 察 表

＊：復元値

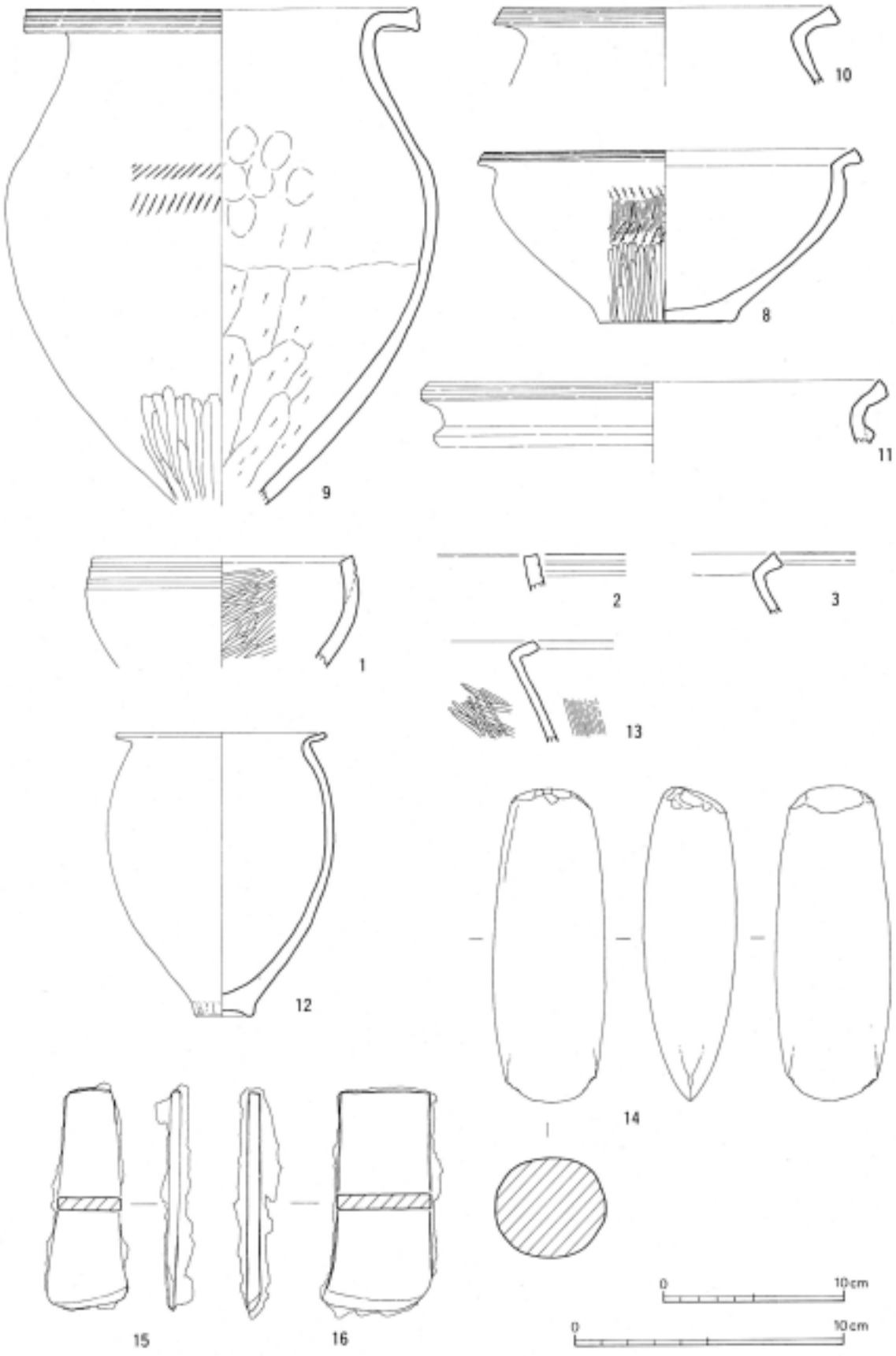
番号	器種	出土位置	寸 法	器 形	調整・成形	備 考
1	高杯	ＳＴ７埋土中	口径 *14.4cm	口縁は内湾し，端部は平らに納める。口縁部に三条の凹線が巡る。	調整は，外面は丁寧なナデ，内面は丁寧な横方向のヘラ磨き。色調はにぶい黄橙色（10YR7/2）を呈し，胎土は長石・石英などの砂粒を多く含み，焼成はややあまい。	
2	高杯？	ＳＴ８埋土中		内傾する口縁を呈する。	調整は，内外面とも丁寧なナデ仕上げ。色調は浅黄色（2.5Y7/3）を呈し，胎土は長石・石英などの細砂粒を含む。焼成は良好である。	
3	壺形土器	ＳＴ11埋土中		「く」の字状の口縁部を呈し，端部は上下にやや拡張し，少しナデて押さえている。	全体的に摩滅が著しいが，口縁部の調整はナデ仕上げである。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し，胎土は長石・石英などの砂粒を多く含む。焼成はあまい。	
4	壺形土器	ＳＰ１	口径 12.8cm 器高 27.1cm 底径 5.4cm 胴部最大径 23.7cm	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや上下に拡張し，二条の凹線が巡る。胴部は最大径を中央よりも若干上方にもつ倒卵形である。底部は平底である。	調整は，口縁部は横ナデ，胴部外面は底部から約１／３は縦方向のヘラ磨き，それ以上はナデ仕上げで，胴部最大径のやや上方に二段に貝殻腹縁による刺突紋が巡る。胴部内面はほとんどがナデ仕上げで，ヘラ削りは底部から１／４までの範囲である。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し，胎土は1㎜の長石・石英を多く含み，焼成は良好である。	底部穿孔
5	壺形土器	ＳＰ２	口径 31cm 器高 80cm 底径 9cm 胴部最大径 47.8cm	擬口縁部は強く「ハ」の字状に外反し，その端部に外反しながら立ち上がる口縁部が内傾してつく。口縁端部は平たく納める。口縁部には櫛歯状の工具による波状紋と竹管紋が二段ずつ施されている。胴部は倒卵形を呈し，頸部には粘土帯を貼り付け，ヘラ状工具で格子状に刻目紋が施されている。	調整は，口縁部の外面はナデ仕上げ，内面は一部刷毛目が残る。擬口縁部は内外面とも刷毛目，胴部外面は刷毛目ののち，ヘラ磨きが施されている。胴部内面は刷毛目で，底部付近には粘土の剥ぎ取りの痕跡が残る。色調は，外面は橙色（5YR6/6），内面はにぶい橙色（7.5YR7/4）で，胎土は２～3㎜大の長石・石英などの砂粒を多く含み，焼成は良好である。	底部穿孔
6	壺形土器	ＳＰ３	口径 18.4cm 器高 63.3cm 胴部最大径 32.2cm	擬口縁部は「ハ」の字状に外反し，その端部に口縁部が直立し，口縁端部が施されている。	調整は，口縁部の外面は縦方向に貝殻腹縁による刷毛目，内面は横方向の刷毛目，胴部外面は縦方向の，胴色調は，外面は橙色（５YR6/6），内焼成は良好である。	底部穿孔

*：復元値

番号	器種	出土位置	寸　法	器　　形	調整・成形	備　　考
7	壺形土器	ＳＰ４	胴部最大径　40.7cm	口縁部は欠損するが，擬口縁部は「ハ」の字状に強く外反する。胴部はなで肩で，わずかに底部が残るが，ほぼ丸底である。最大径はほぼ中央にくる。	調整は擬口縁部外面はナデ，内面は横方向の磨き痕跡が残る。胴部は，外面は刷毛目ののち，一部ヘラ磨き，内面は肩部以外は縦方向の刷毛目調整である。 色調は，外面はにぶい黄橙色（10YR7/4），内面は明黄褐色（10YR7/6）で，胎土は1～2㎜大の長石・石英などの砂粒を多く含む。焼成は良好である。	底部穿孔ののち，土器を破損している。
8	鉢形土器	ＳＫ１埋土中	口径　*20.5cm 器高　9cm 底径　7cm	「く」の字状の口縁部を呈し，端部は上下にやや拡張し，三条の凹線が巡る。体部は内湾気味に立ち上がる。底部は平底で，やや窪む。	調整は，体部外面上半部は刷毛目ののち，横「ハ」の字状に貝殻腹縁による刺突紋が施される。下半部は縦方向のヘラ磨きである。内面はナデ仕上げである。 色調は橙色（5YR6/6）を呈し，胎土は長石・石英などの砂粒を多く含む。	
9	甕形土器	ＳＸ１埋土中	口径　21.6cm 胴部最大径　23.9cm	口縁部はほぼ横方向に広がり，端部は上下に拡張する。二条の凹線が巡る。胴部は，肩部がなで肩を呈し，胴部最大径が中央のやや上方にくる倒卵形を呈する。	調整は・外面は底部付近に縦方向のヘラ磨きが施されているほかはナデ仕上げ，内面は，ヘラ削りが胴部最大径付近まで施されている。そのほかは，ナデ仕上げ。最大径付近に，貝殻腹縁による刺突紋が二段に施されている。（上は右側から，下は左側から）。 色調は，外面はにぶい黄橙色（10YR7/3），内面はにぶい黄橙色（10YR7/4）で，1㎜大の長石・石英などの砂粒を多く含み，焼成は良好である。	
10	甕形土器	ＳＸ１埋土中	口径　*18cm	「ハ」の字状にひらく口縁部で，端部は上下に拡張し，二条の凹線が巡る。	調整は摩滅が著しく不明である。 色調は赤褐色（2.5YR4/6）を呈し，胎土は長石・石英などの砂粒を多く含む。焼成はあまい。	
11	甕形土器	ＳＸ１埋土中	口径　*24.9cm	「ハ」の字状にひらく口縁部で，端部は上下に拡張し，二条の凹線が巡る。	調整は摩滅が著しく不明である。 色調は赤褐色（2.5YR4/6）を呈し，胎土は長石・石英などの砂粒を多く いる。	
12	甕形土器	調査区内	口径　*11.5cm 器高　14.7cm 底径　3.1cm 胴部最大径　12.6cm	「く」字状を呈する口縁部は，やや内湾気味に広がり，端部は平らに納める。肩部はあまりしま 窪み底である。	調整は，外面は摩滅が著しく不明で，内面は丁寧なナデ仕上げである。底部付近にナデた指頭圧痕が残る。 色調は橙色（7.5YR6/6）を呈し，胎	
13	甕形土器	調査区内		口縁部は「く」の字状を呈し，端部は面をもって納める。	調整は，口縁部はナデ仕上げ，胴部は，外面は縦方向の刷毛目，内面はヘラ磨きである。 色調は灰黄色（2.5Y7/2）を呈し，胎 焼成は良好である。	



第11図　出土遺物実測図〔１〕（４はＳ＝１：３，その他はＳ＝１：６）



第12図　出土遺物実測図〔２〕（15・16はＳ＝１：２，その他はＳ＝１：３）

Ⅳ　ま と め

本遺跡では，調査の結果17基からなる墳墓群が確認された。墓壙のほとんどは長軸方向を尾根の等高線と平行に沿わせる形で，全体として円弧状に配置されている。ここでは，これらの墳墓群が築造された時期やその性格等について考察しまとめとしたい。

１．墳墓群の築造時期及び性格について

前述したように，墳墓群に伴う副葬品や供献遺物は全く出土していない。遺構時期を確定しえる遺物としては，土器棺墓３基及び土器蓋土壙墓１基に使用されている壺形土器に限られる。ＳＰ１に使用された土器は，弥生時代中期後葉から末葉の時期に位置づけられる。ＳＰ２の土器に関しては，弥生時代終末期から古墳時代初頭に位置づけられ，またＳＰ３の土器はこれよりもやや古い様相を呈している。ＳＰ４に使用されている土器は，ＳＰ２の土器の時期に近いものと考えられる。これらの土器棺墓及び土器蓋土壙墓は，土壙墓を切っていることはあっても逆に土壙墓に切られていることはないので，本墳墓群は全体として少なくとも弥生時代中期後半から終末期ないし古墳時代初頭に至るまでの時期に，断続的に築造されたものと考えられる。

土壙墓については時期を明確にできないものの，ＳＴ６がＳＰ２に，ＳＴ８がＳＰ３に，またＳＴ10がＳＰ４によってそれぞれ切られていることから，少なくともこれらの土壙墓は各土器棺墓等よりも築造時期が古いと言える。しかし，各土壙墓の築造時期は明らかではないため，その時間的な間隔は不明である。ただ，尾根の等高線に沿うという規則的な構築方法や，規模の大小はあるもののいずれも副葬品を伴わない等の特徴からいわゆる共同墓地として捉えられ，各土壙墓はあまり間隔をあけずに連続して構築されたと考えられる。こうしたことから，あくまでも推定の域を出ないが，土壙墓群についてはＳＰ２～４よりも前の段階に相次いで構築されたと考えられ，その築造開始時期は中期後半にまで遡る可能性もあろう。

なお，葬送儀礼の場所であったと推測されるＳＸ１から出土した土器が中期後半に属することも，本墳墓群がこの時期にまで遡ることの傍証となろう。

ところで，これら土壙墓群の築造順序を考えることで，その性格等について推察してみたい。そこで，まずＳＴ８及びＳＴ11の２基に注目してみると，これらは本土壙墓群中で突出した規模を誇っている。その中に据えられた木棺の規模は他のものと比べてみてもさほど差が見られず，また副葬品が見られない等の点があるものの，墓壙の規模を大きくすることで他の被葬者との差別化が図られていることから，これらの被葬者はこの集団墓地の中においてある程度特別な位置にあった人物であったものと解釈される。

次に各土壙墓の深さに着目してみると，34cmよりも浅いグループ（ＳＴ４・５・９・10・12）と，40㎝よりも深いグループ（ＳＴ１・２・３・６・７・８・11・13）とに大別される。それぞれのグル

ープ内では土壙墓はほとんど切り合うことなく立地しているが，配列に著しい規則性が見られるわけではない。また，浅いグループに関しては，遺体を埋葬するには深さが不足しており，何らかの理由で上面が削平されたと推測される。その原因を考える手がかりとして，土壙墓群中央付近での切り合い関係があげられる。ここでは，浅いグループに属するＳＴ４及び５がそれぞれ深いグループのＳＴ８及び７に切られており，前者が後者に先行して築かれたことが分かる。このことからすると，本土壙墓群全体としては，まず浅いグループが築かれ，その後に地面を一旦削って整える作業が行われてから，改めて深いグループが築かれたと考えられる。

ところが，土壙墓群の東端では，ＳＴ12がＳＴ11を切っている状況がある。深いグループのＳＴ11が浅いグループのＳＴ12よりも先行しており，先の推定を前提とすれば矛盾がでてくる。しかしＳＴ11を他の深いグループとは分けて捉えてみることで，この問題は解決するのではないだろうか。前述したように，ＳＴ11の被葬者は集団内の特別な地位にあった人物の一人と推定される。その人物は実は浅い土壙墓に葬られた人々のリーダーであり，彼の墓は集団の墓に先行して単独で築かれていたと考えることはできないだろうか。そして，深いグループの築造に際して，浅いグループと同様に上面の削平を受けたと推定される。

このように土壙墓群の築造に関しては，ある程度の段階があることがうかがえる。そして，ＳＴ11が本土壙墓群において初期の段階で築かれており，一方ＳＴ８が削平作業後に築かれたグループに含まれることからすると，削平作業をはさんで前後２段階に分けられる各グループは，それぞれＳＴ11及びＳＴ８の被葬者を中心に地縁あるいは血縁といった何らかの関係でまとまった集団であった可能性が考えられる。

土器棺墓に関しては，墳墓群の西端に位置するＳＰ１を除く３基が土壙墓を切って構築されているが，その設置にあたっては，当時比較的平坦となっており，かつ数基の土器棺が埋設できるだけの広さの場所が選ばれたものと思われる。また，土壙墓との切り合いがわずかしか見られないことから考えると，先人達の墓である土壙墓群をある程度意識して，それらをなるべくかわして選地したとも考えられる。このことは，土壙墓群と土器棺墓群との築造の時間的間隔を考える上でも参考となろう。

２．広島市域における本遺跡の位置付け等について

次に，本墳墓群に葬られた人々の居住地について触れてみたい。一般に広島湾周辺における弥生時代の集落は，中期前葉までは河川の後背湿地や河岸段丘の周辺等の比較的低い場所が選ばれていたが，中期中葉から後葉の時期以降は，次第に丘陵上に築かれるようになったとされている。さらに，集落を眼下に望める場所に墓地が営まれている例が多いという点から居住地を推定してみると，本遺跡から北に少し下った尾根上が最も適当な場所と思われる。この尾根の先端付近には成岡Ａ地点遺跡1)があるが，発掘調査では弥生時代終末頃の小規模な集落跡が確認されたのみである。その時期や規模から考えると，この地点が本墳墓群を営んだ集団の居住地とは考えにくい。そこで，同

一尾根筋の別の地点や近隣の尾根上，あるいはそれらの尾根の麓に居住地の候補が求められるのではないだろうか。彼らは，成岡川や押手川に沿った沖積地を生産基盤として生活を営んでいたと考えられるが，残念ながら現段階ではその確認にまでは至っていない。周辺地域での今後の発掘調査の増加が期待される。

最後に，広島市域全体から見た本遺跡の位置付けについて考察してみたい。先述のとおり，本墳墓群の築造は弥生時代中期にまで遡る可能性が高い。市内における同時代の墳墓遺跡の発掘調査例は多くなく，いずれも太田川流域に位置する佐久良遺跡 2)・丸子山遺跡 3)・狐ヶ城遺跡 4)・大町七九谷Ｃ地点遺跡 5)及び県史跡牛田の弥生文化時代の墳墓（早稲田神社東斜面遺跡）6)が知られているのみである。これらの遺跡を概観してみると，佐久良遺跡や丸子山遺跡といった内陸部に位置している遺跡は主に箱形石棺を埋葬施設の中心としており，沿岸部では土壙墓が主体となっているという傾向がうかがわれる。数少ない事例からの想定であるので明言は避けなければならないが，このことは市域でも太田川流域における同時代の墳墓の特徴の一端を示しているのではないかと思われる。一方，瀬野川流域の沿岸寄りに位置する本遺跡においては，箱形石棺は検出されず，土壙墓を中心に構成されている状況が確認された。このことは，先述した傾向が，太田川流域だけではなく瀬野川流域をも含めたものである可能性も出てきたと言えよう。しかしながら，これを確かな特徴として立証するには基礎データが不足しており，この傾向が全市域で認められるかどうかも含めて，今後の調査の増加に期待したい。

いずれにしても，本遺跡の発掘調査は市域東部における弥生時代の墳墓遺跡としては初めての事例であり，当該地域における墓制の解明に向けての嚆矢となったばかりでなく，中期にまで遡りえる市域でも数少ない事例として市全域の状況を捉えるための貴重な資料を提供したと言える。今後の資料の蓄積を待って，更なる検討を加えていきたい。

注

1）財団法人広島市文化財団『成岡Ａ地点遺跡発掘調査報告』2001 年

2）広島市教育委員会『佐久良遺跡発掘調査報告』1984 年

3）石田彰紀「丸子山遺跡」『日本考古学年報』1978 年

広島市『中山村史』199!年

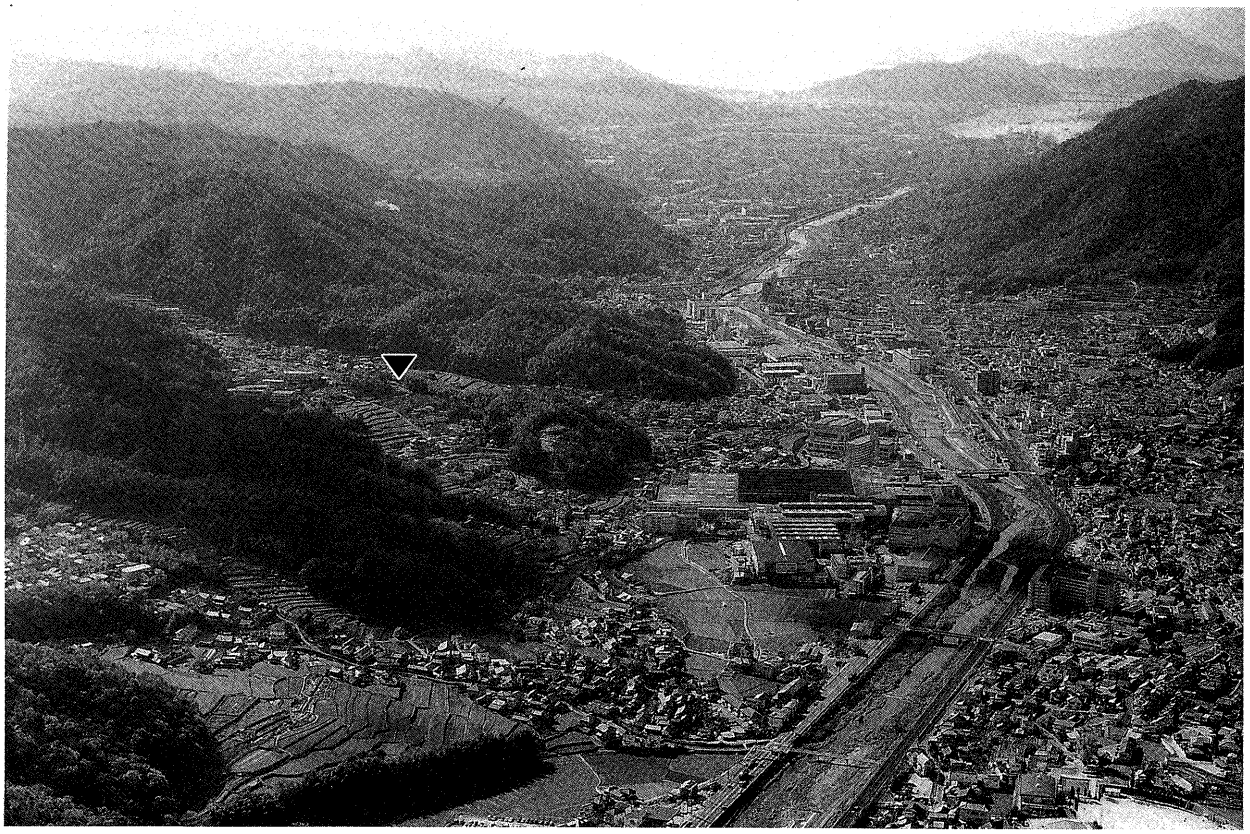
4）広島県教育委員会「狐ヶ城遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1999 年

5）財団法人広島市文化財団「大町七九谷Ｃ地点遺跡」『大町七九谷遺跡群発掘調査報告』1999 年

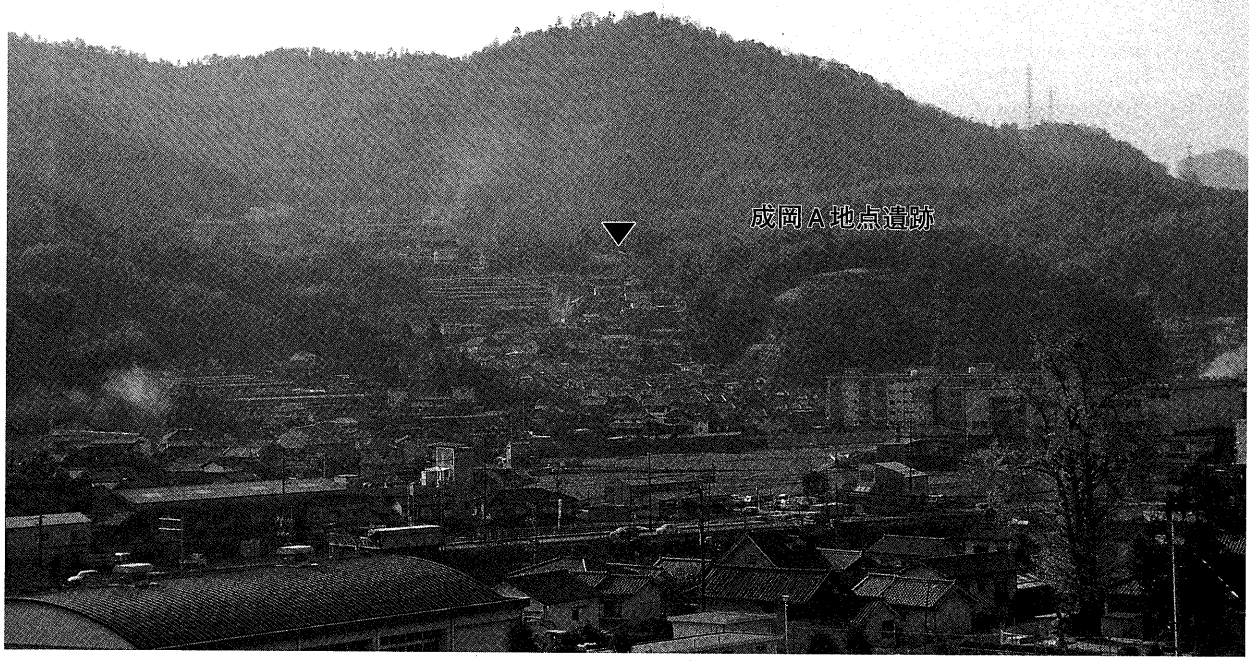
6）潮見浩「山陽地方における弥生時代の墓制－広島県発見の 3 例を中心として－」『古代学』第八巻第二号　1959 年

広島市役所『新修広島市史』第一巻総説編　1961 年

図　　版



成岡Ｂ地点遺跡航空写真（北東から）



a．成岡B地点遺跡遠景（北東から）



b．成岡B地点遺跡航空写真（調査後・北から）



遺構完掘状況（北東から）



a．ＳＴ１完掘状況（南東から）



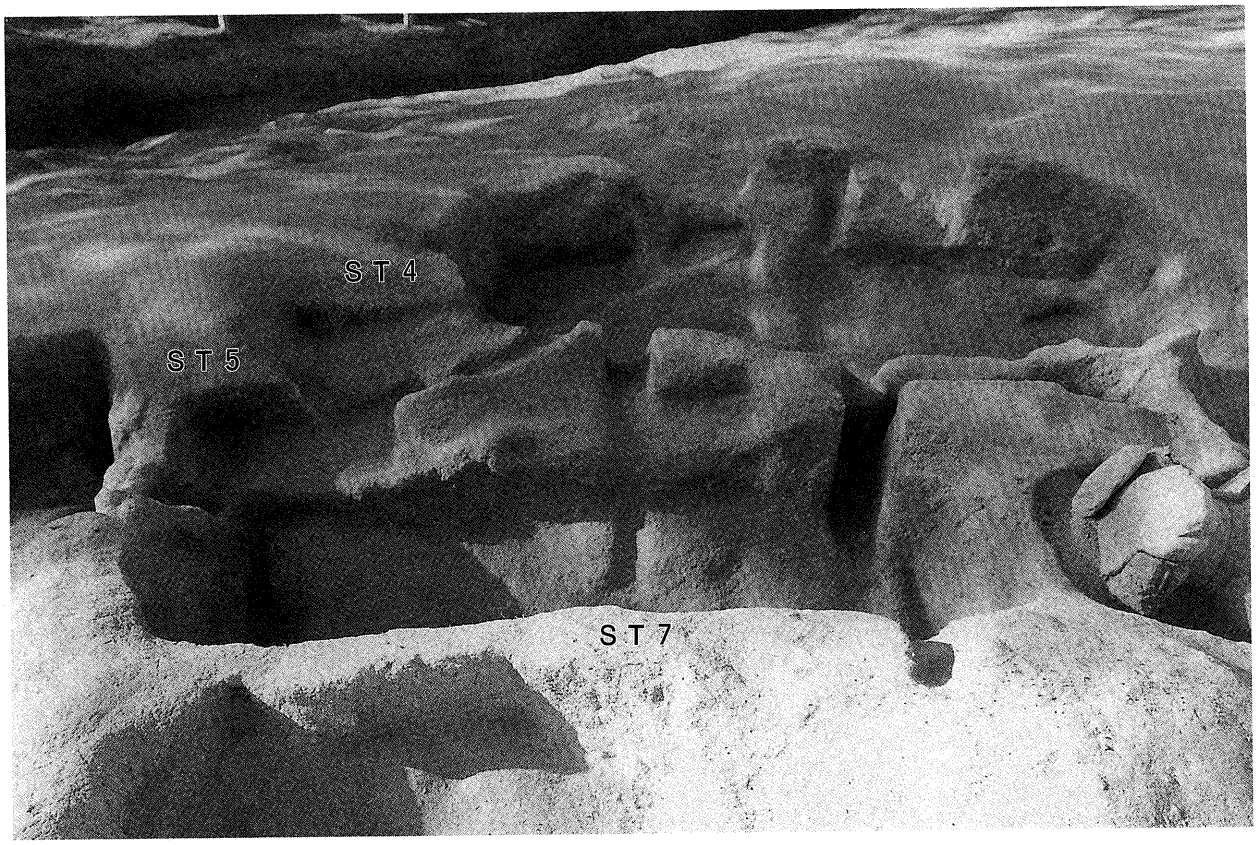
b．ＳＴ３完掘状況（南東から）



a．ＳＴ２礫出土状況（南東から）



b．ＳＴ２完掘状況（南東から）



a．ＳＴ４・ＳＴ５・ＳＴ７完掘状況（南東から）



b．ＳＴ６完掘状況（南東から）



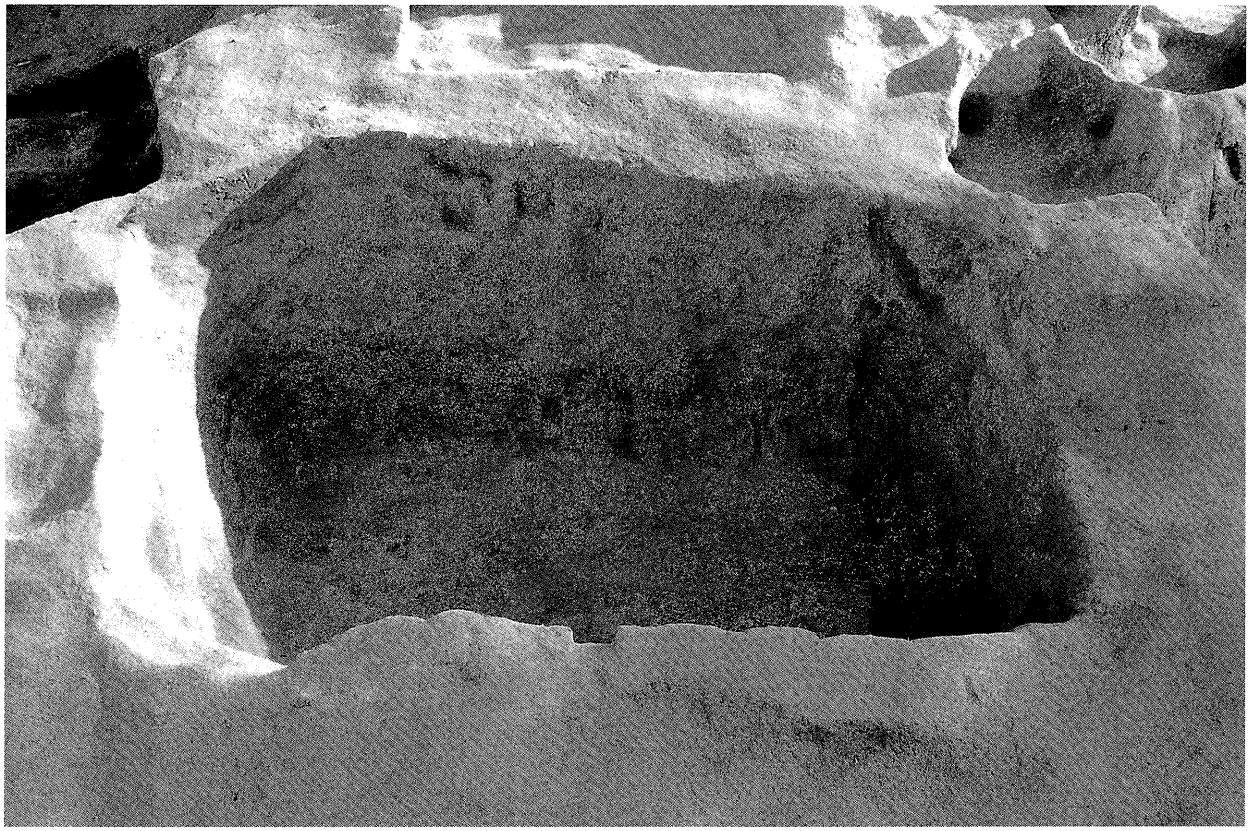
a．ＳＴ８完掘状況（南東から）



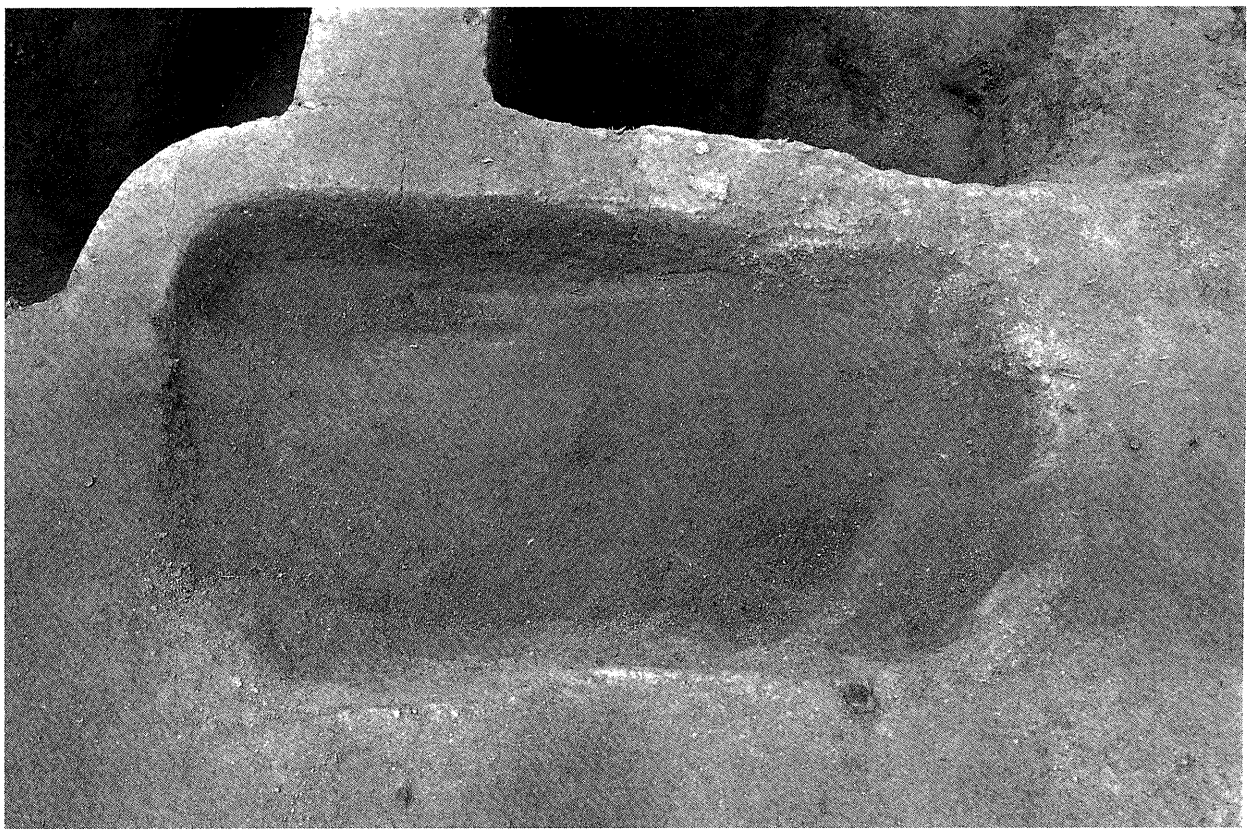
b．ＳＴ９完掘状況（南東から）



a．ＳＴ10完掘状況（南から）



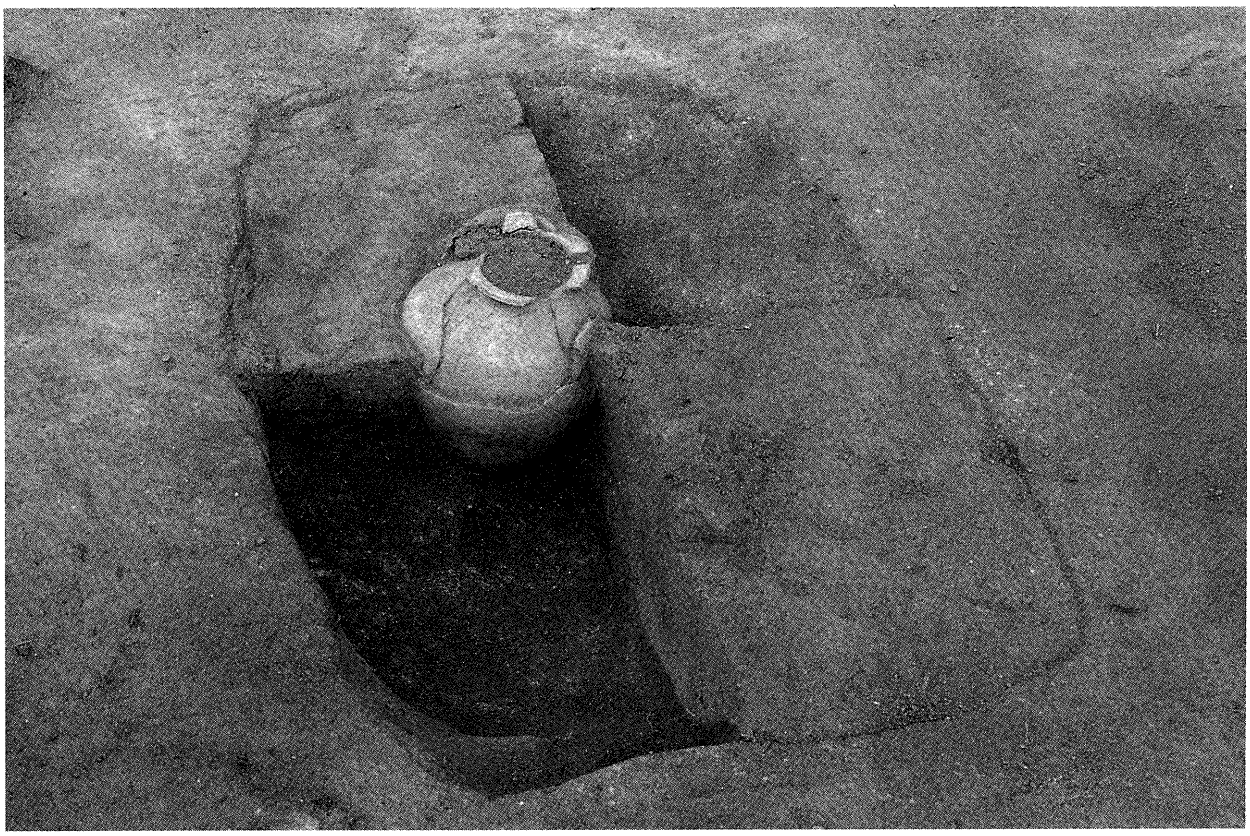
b．ＳＴ11完掘状況（北から）



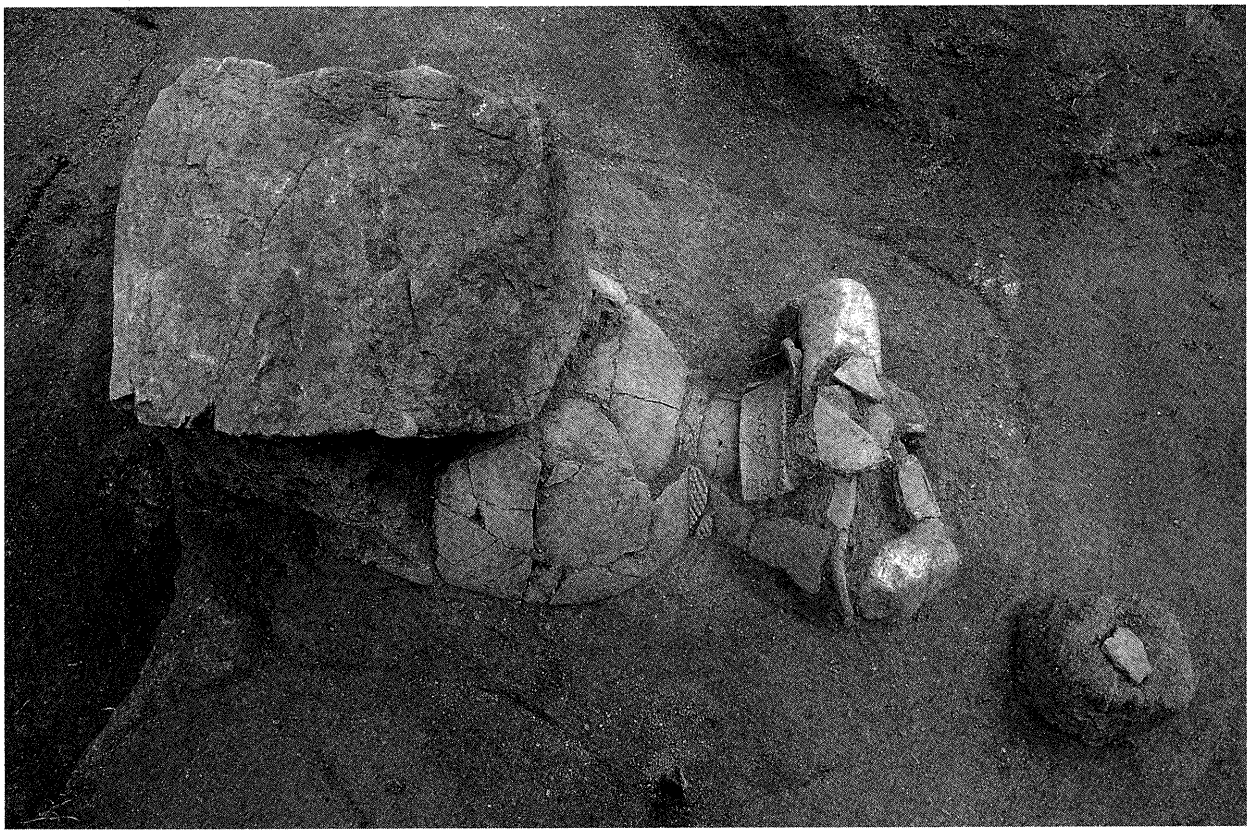
a．ＳＴ12完掘状況（東から）



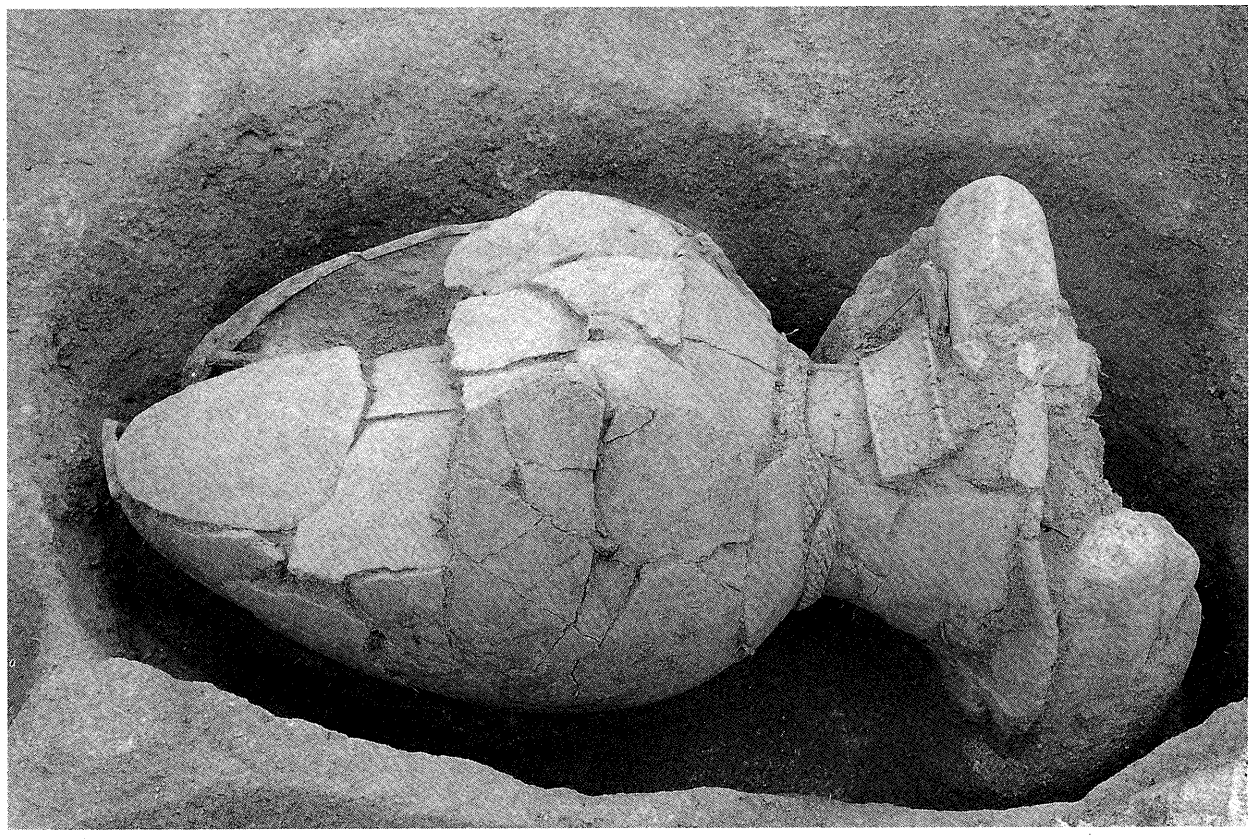
b．ＳＴ13完掘状況（南東から）



a．ＳＰ１土器棺確認状況（東から）



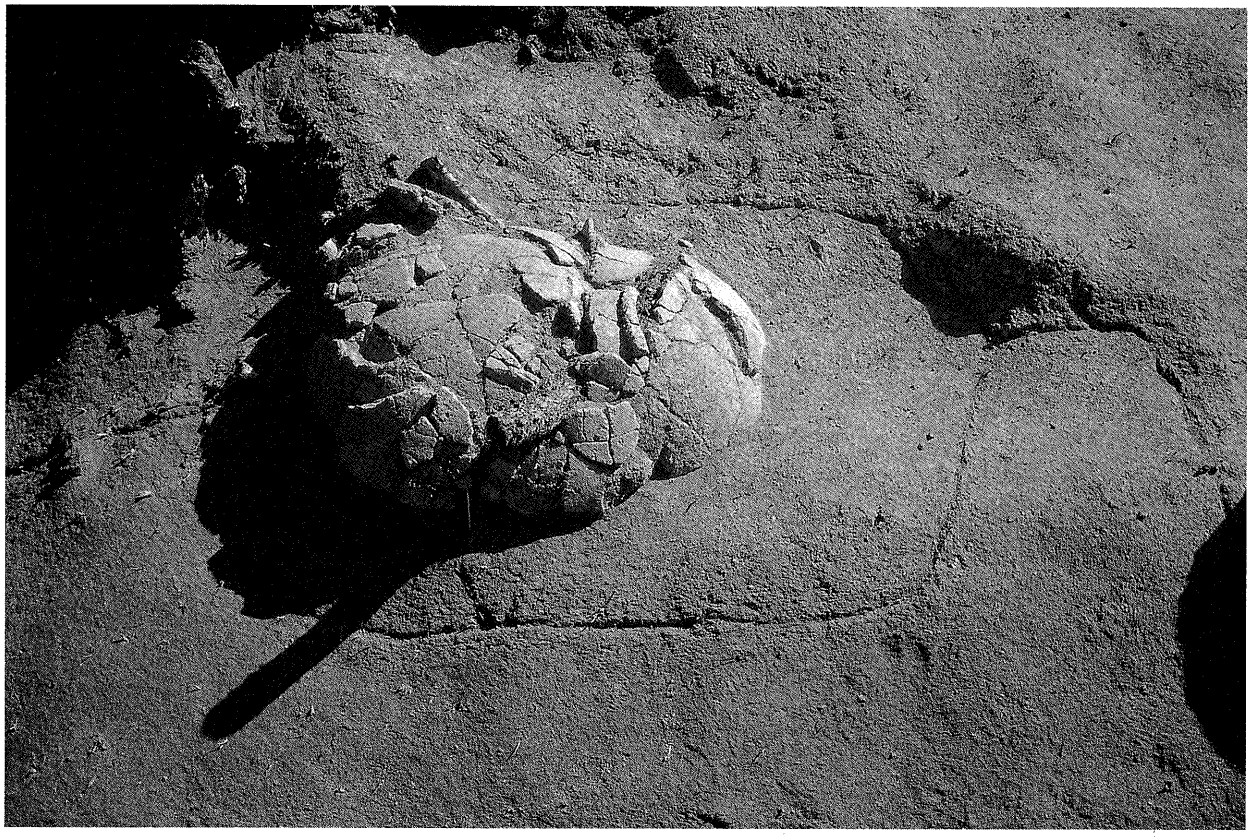
b．ＳＰ２墓標石確認状況（北西から）



a．ＳＰ２土器棺確認状況（北西から）



b．ＳＰ３土器棺確認状況（南東から）



a．ＳＰ４土器蓋確認状況（北から）



b．ＳＫ１完掘状況（南から）



a．ＳＸ１完掘状況（北から）



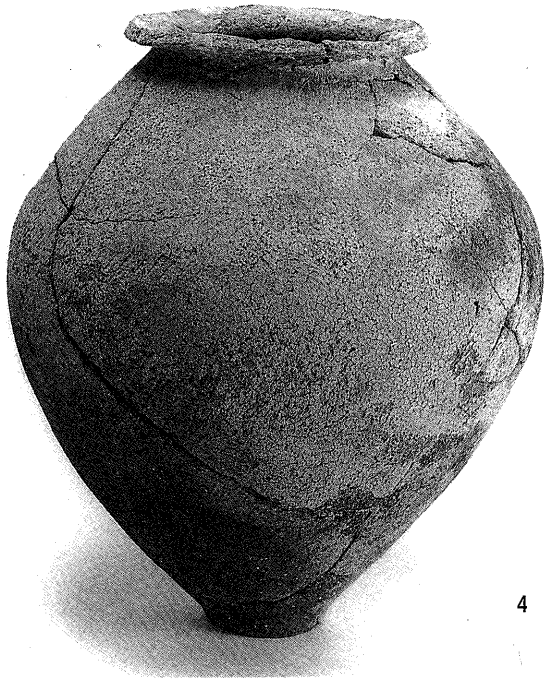
b．ＳＸ１土器出土状況（東から）



5



6

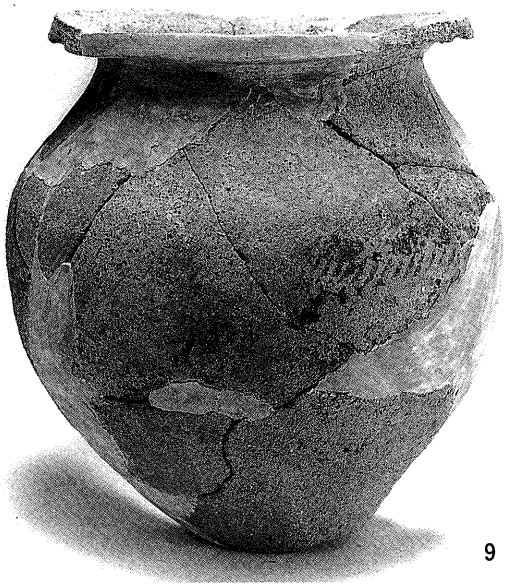


4



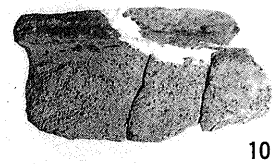
7

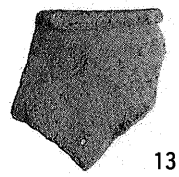
出土遺物〔1〕

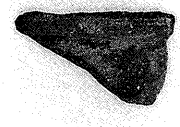

9


8

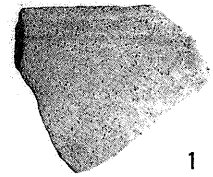

11

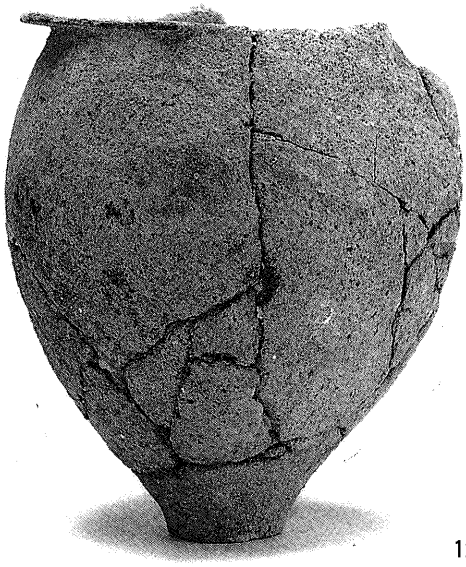

10


13


3

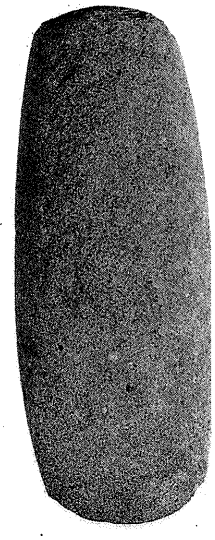

2

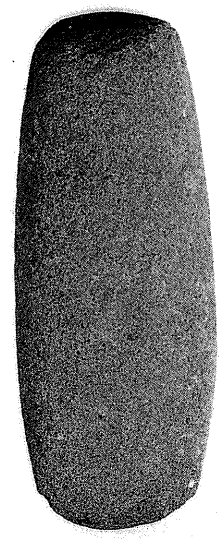

1


12


15


16




14

出土遺物〔2〕

報告書抄録

ふりがな	なりおかBちてんいせき　－ひろしましあきくなかのひがしにちょうめしょざいー
書名	成岡Ｂ地点遺跡　－広島市安芸区中野東二丁目所在－
副書名	
巻次	
シリーズ名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書
シリーズ番号	第８集
編著者名	稲坂恒宏
編集機関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
所在地	〒730-0812 広島県広島市中区加古町４番17号　アステールプラザ内
発行年月日	西暦2001年11月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °，”	東経 °，”	調査期間	調査面積	調査原因
なりおかBちてんいせき 成岡Ｂ地点遺跡	ひろしまけんひろしましあきく 広島県広島市安芸区 なかのひがしにちょうめ 中野東二丁目	34107	―	34° 23’ 5”	132° 34’ 21”	20000703 ～ 20001213	500m²	一般国道2号（東広島バイパス）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
成岡Ｂ地点遺跡	墳墓群	弥生時代	土壙墓　13基 土器棺墓　３基 土器蓋土壙墓１基 土坑　１基 テラス状遺構１か所	弥生土器 石器 鉄器	弥生時代中期まで遡る墳墓群

財団法人広島市文化財団発掘調査報告書　第８集

成岡Ｂ地点遺跡

―広島市安芸区中野東二丁目所在―

2001年11月

編集発行　財団法人広島市文化財団

広島市中区加古町４番17号　TEL(082)248-0427

印　刷　株式会社中本本店

広島市中区東白島町13番15号